主要なる正誤

頁	行	誤	正
十四、	十、	〔助詞〕	〔後置詞〕
十九、	八、	皆は	皆は
二十八、	七、	（歎詞）	（感歎詞）
三十、	三、	ほりえ江	ほりえ堀江
三十一、	十一、	もたえ	もだえ
三十二、	三、	（たかゆ）	（なかゆ）
同	八、	うずゐ	うづゐ
同	十、	つくゐ	つくゐ机
十三頁より三十二頁までの欄外。		第一項音の種別	第二項 發音法及び假名遣ひ。

三十四、九、　をか
三十五、一、　を（歎詞）
三十六、十一、　をけう
四十三、九、　をけら
同　同　さふらふ候　あふち楝加ア
四十八、一、　ひわ　さふらふ候
四十九、八、　みゆ所　ひは鵜
五十七、一、　むてむ、なむ、らむ、たらむ、　みゆ所見
同　二、　なむ（希望助動詞ノ）　むてむ、なむ、（未來助動詞ノ）
同　同　なむ（助詞）　なむ（希求後置詞ノ）
同　九、　行きてん　なむ（強抑後置詞ノ）
行きてん

同　十、　かんつどひ　水獺
五十八、八、　かんつどひ神集　川獺
六十、五、　イ、井、平、　イ、井。平、
六十四、五、　定デイ　定デイ
六十五、七、　〔上聲〕　〔去聲〕
六十七、八、　闘ツ　闘ツ
同　九、　赴ク　赴ク
八十四、十一、　感動詞　感歎詞
八十八、五、　感動詞　感歎詞
同　同　感動　感歎
八十九、一、二、三、　悉ク　小活字ニ改ム

九十四、八、　書（受用）を送る。（動）

同　同　五十（用主）は三十（副用）、

より多し。（形）

九十八、九、　我れ

百二、　十一　して、

百十一、二、　する

同　四、　ダ行

同　五、　ーふん

百十二、八、　（心得）

百十三、十、　ーるう

百二十、十一、　熟形動詞

書（受用）を送る。（動）

五十（用主）は三十（副用）

より多し（形）

我れ（用主）

削ル

ずる

ダ行

ーふれ

（心得）

ーうる

複形動詞

百二十四、六、　一段活

百四十一、九、　とく（動）行き

百四十四、三、　十四

百八十九、二、　櫻も

百九十五、十一、　此の事……十行ニ續クベシ

二百五、一、　花を惜む。

二百七、二、　章點○

此ノ外、活字ノ分合ヲ誤リタル所、少カラザレドモ、一々摘錄セズ。偏ニ讀者ノ推シ且ツ正サレン事ヲ希フ。

上一段活

とく（動）行き

（十四）

櫻も

十行ニ續クベシ

花を、惜む。

章點。

文學士 杉 敏介 著

日本小語典

全

東京 內外出版協會

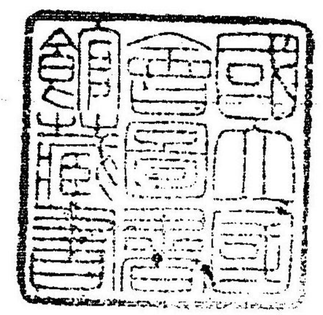
815 Sa 718n

日本小語典

緒言

一世に語典の書多し。余も嘗て一の文典を公にしたることあり。而して、今又之れを試むるは、闊年從學の間、更に考案の新なるものあるを信ずればなり。尚年と學とを積むに隨ひて、愈進境に至らむことを、竊に自ら望み且つ期す。

一國語の假名遣は極めて緊要の事



260825

に屬す。而して、小學に於いて之れを修むること十分ならず。中學の初級生に必ず課すべきものなり。故に煩を厭はず、之れを列擧せり。

一　語の分類は、形體上の分類に偏し、內容上の區別に惑ひて正鵠を失ふもの多し。形體、內容を顧みて、形體、內容に惑はず、正に性質上の分類を遂げたりと信ず。

一　語の各論、說の分類、作說法等に於いて、亦聊苦慮の果を見たりと

信ず。識者の、叱正を俟つ。

一　語の間を別つことは、大に意を注ぎたりといへども、創始の業にして、錯亂、不備多かるべし。再版に更に訂正せむ。

明治三十三年一月

杉　敏介　識す

日本小語典　目錄

○序論。　一

○第一章、音。　七

第一項、音の種別。　七

第二項、發音法及び假名遣。　一三

第三項、漢字音の假名遣。　五九

第四項、語に於ける音の變動。　六七

○第二章、語。　八一

第一項、語の種別。　八一

第二項、語の各論。
第一、名詞。 九
第二、代名詞。 八九
第三、數詞。 九五
第四、格詞。 九九
第五、動詞。 一〇一
第六、形容詞。 一〇五
第七、副詞。 一二八
第八、助動詞。 一三五
第九、接續詞。 一三八
第十、感歎詞。 一五四
第十一、後置詞。 一五七
一五九

○第三章、說。
第一項、說の種別。 一六九
第一、說の體裁。 一六九
第二、說の構造。 一七〇
第二項、作說法。 一七二
第一、措語法。 一八二
第二、係結法。 一八二
第三、引用法。 一八七
第四、省略法。 一九一
第五、施點法。 一九六
二〇三

日本小語典

序論。

文學士　杉　敏介　著。

㊀　吾等、日本人が互に意思を通ずる爲めに用ふる言語を國語と云ふ。日本語典は國語の性質及び用法を明かにするものにして、之れに據りて國語を正しく用ひ又正しく解くことを知るべきなり。

㊁　國語は吾等の用ふる音、語、說、字、

日本小語典

文學士　杉　敏介　著。

序論。

㊀　吾等、日本人が互に意思を通ずる爲めに用ふる言語を國語と云ふ。日本語典は國語の性質及び用法を明かにするものにして、之れに據りて國語を正しく用ひ又正しく解くことを知るべきなり。

㊁　國語は吾等の用ふる音、語、說、字、

點の總稱なり。

三 音とは口より發する聲にして、未だ何の意義も無きものにして、之れを綴りて語をつくるものなり。

ア、イ、ウ、エ、オ、
カ、キ、ク、ケ、コ。

四 語とは音を綴り成して箇々の物事を言ひ表はすものにして、之れを編みて說をつくるものなり。

アメ、ツチ、タレ、カレ、
ユク、カヘル、ヨシ、アシ。

五 說とは語を編み成して或る事柄を說き明かすものなり。

おでるものはひさしからず。

言語は君子の樞機なり。

よくまなびてよくあそべ。

人と生れて鳥にだも如かざるべけむや。

六 音、語、說を書き表はしたるものを字と云ふ。

字には日本固有の假名と漢字を借りたるものの二種あり。

ア、カ、サ、タ、ナ、バ、ビ、ブ、ベ、ボ。

阿、加、左、多、奈、婆、毘、弗、閉、菩。

ことば、みち、ひと、まなび、うまる。

多摩川、富士山、奈良、伊勢、學び。

善は小なりといへども、爲さざるべからず。

七 點とは字の斷續を表はす爲めに用ふる符號なり。

月明かにして、星稀れなり。

『汝が姓は何ぞ』と仰せられしかば、『夏山となむ申す』と申し

き。

八 之れを要するに、音は單一にして意味なく、語は音より成りて始めて意味あり、說は語より成りて事柄を說くものなり。左の例にて音、語、說は各幾個あるかを云へ。

たゝ、みかざれば、うつはをなさず。

ひと、まなばざれば、みちをしらず。

九 此の語典は是等の音、語、說、字、點

の性質及び用法を説明するものにして、是れより左の順序に隨ひてその要領を摘擧すべし。

第一章　音

第二章　語

第三章　說

（設問）國語とは何ぞ。音とは何ぞ。語とは。說とは。字とは。

第一章、音。

第一項、音の種別。

㊀ 音を類別して四種とす。直音、拗音、鼻音、促音、是れなり。音を書き表はす字を假名と云ひ、之れに平假名、片假名の二體あり。

㊁ 直音　七十五（七十二）

片假名圖

行＼列					
ア行	ア	イ	ウ	エ	オ
	列	列	列	列	列

平假名圖

行＼列					
あ行	あ	い	う	え	お
	列	列	列	列	列

清直音はもと五十なれども、ヤ行のイ、エ、ワ行のウはア行のイ、エ、ウ、に

半濁	濁				清								
パ行	バ行	ダ行	ザ行	ガ行	ワ行	ラ行	ヤ行	マ行	ハ行	ナ行	タ行	サ行	カ行
パ	バ	ダ	ザ	ガ	ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ
ピ	ビ	ヂ	ジ	ギ	ヰ	リ	イ	ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ
プ	ブ	ヅ	ズ	グ	ウ	ル	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク
ペ	ベ	デ	ゼ	ゲ	エ	レ	エ	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ
ポ	ボ	ド	ゾ	ゴ	ヲ	ロ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ

半濁	濁				清								
ぱ行	ば行	だ行	ざ行	が行	わ行	ら行	や行	ま行	は行	な行	た行	さ行	か行
ぱ	ば	だ	ざ	が	わ	ら	や	ま	は	な	た	さ	か
ぴ	び	ぢ	じ	ぎ	ゐ	り	い	み	ひ	に	ち	し	き
ぷ	ぶ	づ	ず	ぐ	う	る	ゆ	む	ふ	ぬ	つ	す	く
ぺ	べ	で	ぜ	げ	ゑ	れ	え	め	へ	ね	て	せ	け
ぽ	ぼ	ど	ぞ	ご	を	ろ	よ	も	ほ	の	と	そ	こ

音も字も同じくなりて、遂に四十七音となれり。ア行のイ、エ、オとワ行のヰ、ヱ、ヲとは混ずべきにあらず。又濁直音のザ行のジ、ズとダ行のヂ、ヅとも混ずべきにあらず。

三　拗音。

(一)　ヤ拗音　五十二。

片假名圖

行＼列			
ア行	イャ	イュ	イョ
カ行	キャ	キュ	キョ

平假名圖

行＼列			
あ行	いゃ	いゅ	いょ
か行	きゃ	きゅ	きょ

(二)　ワ拗音　五十二。

片假名圖

濁中	濁				清							
パ行	バ行	ダ行	ザ行	ガ行	ラ行	マ行	ハ行	ナ行	タ行	サ行	カ行	ア行
ピャ	ビャ	ヂャ	ジャ	ギャ	リャ	ミャ	ヒャ	ニャ	チャ	シャ		
ピュ	ビュ	ヂュ	ジュ	ギュ	リュ	ミュ	ヒュ	ニュ	チュ	シュ		
ピェ	ビェ	ヂェ	ジェ	ギェ	リェ	ミェ	ヒェ	ニェ	チェ	シェ		
ピョ	ビョ	ヂョ	ジョ	ギョ	リョ	ミョ	ヒョ	ニョ	チョ	ショ		

行／列	
列	ア
列	イ
列	エ
列	オ

平假名圖

濁中	濁				清					
ぱ行	ば行	だ行	ざ行	が行	ら行	ま行	は行	な行	た行	さ行
ぴゃ	びゃ	ぢゃ	じゃ	ぎゃ	りゃ	みゃ	ひゃ	にゃ	ちゃ	しゃ
ぴゅ	びゅ	ぢゅ	じゅ	ぎゅ	りゅ	みゅ	ひゅ	にゅ	ちゅ	しゅ
ぴぇ	びぇ	ぢぇ	じぇ	ぎぇ	りぇ	みぇ	ひぇ	にぇ	ちぇ	しぇ
ぴょ	びょ	ぢょ	じょ	ぎょ	りょ	みょ	ひょ	にょ	ちょ	しょ

行／列	
列	わ
列	い
列	え
列	お

濁中	濁				清							
パ行	バ行	ダ行	ザ行	ガ行	ラ行	マ行	ハ行	ナ行	タ行	サ行	カ行	ア行
プァ	ブァ	ヅァ	ズァ	グァ	ルァ	ムァ	ファ	ヌァ	ツァ	スァ	クァ	ウァ
プィ	ブィ	ヅィ	ズィ	グィ	ルィ	ムィ	フィ	ヌィ	ツィ	スィ	クィ	ウィ
プェ	ブェ	ヅェ	ズェ	グェ	ルェ	ムェ	フェ	ヌェ	ツェ	スェ	クェ	ウェ
プォ	ブォ	ヅォ	ズォ	グォ	ルォ	ムォ	フォ	ヌォ	ツォ	スォ	クォ	ウォ

濁中	濁				清							
ぱ行	ば行	だ行	ざ行	が行	ら行	ま行	は行	な行	た行	さ行	か行	わ行
ぷゎ	ぶゎ	づゎ	ずゎ	ぐゎ	るゎ	むゎ	ふゎ	ぬゎ	つゎ	すゎ	くゎ	うゎ
ぷぃ	ぶぃ	づぃ	ずぃ	ぐぃ	るぃ	むぃ	ふぃ	ぬぃ	つぃ	すぃ	くぃ	うぃ
ぷぇ	ぶぇ	づぇ	ずぇ	ぐぇ	るぇ	むぇ	ふぇ	ぬぇ	つぇ	すぇ	くぇ	うぇ
ぷぉ	ぶぉ	づぉ	ずぉ	ぐぉ	るぉ	むぉ	ふぉ	ぬぉ	つぉ	すぉ	くぉ	うぉ

拗音は　ャ拗音　と　ワ拗音　との　二種に限るが故に、くゎし(菓子)　くゎんゐん(官員)　を

くはし　くはんるん　又は　くぁし　くぁんるん　など
と　書くべからず。ァ拗音、ハ拗音　など　いふ
ものは　絶えて　無きことを　承知し　置く
べし。

四　鼻音　一。
片假名　ン　　平假名　ん

五　促音　一。
片假名　ッ（ウッタヘ）　平假名　っ（まったく）

〔設問〕音の種類を言へ。直言の種類を言へ。
清音は幾箇あるか。濁音は。半濁音は。拗音
の種類を言へ。鼻音とは何ぞ。促音とは。

第二項、發音法及び假名遣ひ。

一　音が語の中に綴りこまれたる
と否とを問はず、その發音變じて、
他の音と同じくなることを多し。その
の要綱を左に掲ぐ。

(一)　ヤ行のイ、エ、ヨ行のウは　ア行
のイ、エ、ウと同音、同字なることと
前に云へり。

(二)　ワ行の井、エ、ヲは　ア行のイ、エ、
オと同發音なり。
ゐ(井)、　ゐなか(田舎)、　くらゐ(位)、

ゑ(繪)、　ゑくぼ(笑靨)、　こずゑ(梢)、
を(尾)、　をとこ(男)、　かをり(薫)。

(三)　ダ行のヂ、ヅは　ザ行のジ、ズと同發音なり。

すぢ(筋)、　あぢさゐ(紫陽花)、　ぢんや(陣屋)、
たづ(鶴)、　かづら(葛)、　づきん(頭巾)。

(四)　語の中、尾にあるハ、ヒ、ヘ、ホはワ、イ、エ、オに同じ。

いは(岩)、　くはは(加)、　人は(格詞)、
とひ(問)、　あひだ(間)、　多くは(助詞)、
をしへ(教)、　をみなへし(女郎花)　東へ(格詞)、

かほ(顔)、　こほり(氷)。

(五)　語の中、尾にあるフはウ又ユ、オに同じきことあり。

ゆふ(木綿)、　ゆふ(夕)、　かふ(買)、　こふ(乞)、
かふ(代)、　そふ(添)、　しふる(强)、　たふる(堪)、
たふる(倒)、　あふひ(葵)、　そふ(添)、　たがふ(違)。

(六)　語の中、尾にあるウはユ又オに同じきことあり。

すう(据)、　うる(植)、　はやう(早)、　やう〳〵(漸)、
おとうと(弟)、　せうと(兄)、　こゝろう(心得)。

(七)　語の中にあるヰはユに同じ

き　こと　あり。

ひきゐる(率)　もちゐる(用)　〔もちふる〕

(八)　ムは　ンに　同じき　こと　あり。

むま(馬)、　行き　けむ〔助動詞〕、　行の　む〔助動詞〕。

(九)　語の　首の　ウは　ンに　同じき　こ

と　あり。

うま(馬)、　うめ(梅)。

(十)　ウ、フの　上に　ある　ア列音　は　オ列

音に　同じき　こと　あり。

いたう(痛ク)、　ふかう(深ク)、　かふ(買)、　まふ(舞)。

(十一)　ウ、フの　上に　ある　イ列音　は　ヤ拗

音の　ウ列音に　同じき　こと　あり。

いふ(言)、　ちふ(ト言フ)、　あさぢふ(淺茅生)。

(十二)　ウ、フの　上に　ある　エ列音　は　ヤ拗

音の　オ列音に　同じき　こと　あり。

ゑふ(醉)、　てふ(ト言フ)、　けうとし(氣疎)。

(三)　斯くの　如く　異字に　して　同發音　なる

もの甚だ　多きが　故に、單に　發音の

まゝに　書き　記す　時は、甚しき　誤を　生

ずべし。試に　右に　擧げたる　同發音の

異字を　摘錄すれば、左の　如し。

(一)　發音　イ(い、ゐ、ひ)

(二)　發音　ウ（う、ふ）
(三)　發音　エ（え、ゑ、へ）
(四)　發音　オ（お、を、ふ、ほ、う）
(五)　發音　オ列（ア列、オ列）
(六)　發音　ヤ拗音　ウ列（直音　イ列）
(七)　發音　ヤ拗音　オ列（直音　エ列）
(八)　發音　ワ（わ、は）
(九)　發音　ユ（ゆ、ふ、う、る）
(十)　發音　ジ（じ、ぢ）
(十一)　發音　ヅ（ず、づ）
(十二)　發音　ン（ん、む、う）

三　是等の同發音の異字を誤なく書き記すには較簡便なる法あり。それは同發音の異字の甲を用ふべき語を摘出して、之れを記憶し、記憶外の語には悉く異字の乙を當つるなり。例へば發音ワの場合にわと書くべき語のみを記憶し置けば、記憶外の語には皆はと書きて誤なきなり。但し異字三箇以上ある時は、二箇以上を記憶せざるべからず。而して成るべく、語數少きかたより記憶する

を便とす。これ所謂假名遣なり。然れども猶その語數なかなか多くして、記憶すること難きに似たれども、我國語を學ぶものは必ずその正しき綴字法は知らざるべからず。いかで口にこそさまざまには云へ、字には得書かずなど、いひて已むべきかは。漢文を學ぶにも字畫を正し、英語を學ぶにも綴を誤らじと心掛くるにあらずや。況して我が國民が我が國語を學ぶに於いて、いかで假名遣

を忽にすることを得ん。今左に同音異字の語の數少き方を摘擧すべし。

四　發音イ〔い、ゐ、ひ〕

(甲)語首のイ〔ゐ、い〕。

(ア)〔ゐ〕

ゐたけ居丈。坐リタル身ノ丈。　ゐざま居樣　ゐあひ居合。居ナガラ敵ト立合フ術。

ゐざらひ臀　ゐしき座　ゐまちの月居待月。十八夜ノ月。

ゐざり膝行　ゐしき臀

ゐぎ居木、鞍瓦。鞍ノ上ノ尻ノ當タル所。　ゐざり未底。犁ノ土ニテ底ニ着ク部。　ゐろり爐

ゐる居　ゐる牽

ゐる間、苑。

ゐむしろ茵席

ゐ井　ゐもり蜥、井守。　ゐせき堰塞　ゐや禮　ゐやゝかに恭　ゐやじろ禮物ゐやじり　ゐ亥　ゐぐち秋菌ノ名　ゐのとき草ノ名　ゐのつめゐのおしニ同ジ。

ゐげた井桁　ゐなか田舎、井中。　ゐぐひ堰杭　ゐやぶ敬　ゐやゝし恭　ゐのし〻猪　ゐのこ豕　ゐのこづち春草ノ名蒔蘿。茴香ニタル草。　ゐのんぞ似タル草。　ゐのあし帛ヲ卷ク織リタル布機具。

ゐづゝ井筒　ゐ堰　ゐやまふ敬　ゐやなし無禮　ゐのしりぐさ臭キ草ノ名

○熟語は單語より推して知る

べければ、一々掲げず。例へば、ゐまど井戸　ゐねむり坐眠は居る居より推し、ゐぞはり井堀は井より推して知るが如し。以下之れに準ふべし。

(イ)〔い〕右の外皆いなり。

(乙)語中、語尾のイ(い、ゐ、ひ)。

(ア)〔ゐ〕

とのゐ宿直、殿居。　もとゐ基、本居。　くらゐ位、座居。
しきゐ下檻、閾。　かもゐ上檻、鴨居。かもえ。
とりゐ神門、鳥居。　まとゐ圓居　こしゐ蹲、腰居。
かたゐ乞丐、傍居。　くもゐ雲居　うなゐ髫髮。童ノ髮ヲ項ニ垂ルヽコト。

おりるのみかど上皇。位ヲ退キ居玉ヘル天皇。　まゐる参
ひきゐる率　しほさる潮騒。潮騒ギ満チ來ルコト。
ある藍　くれなる紅、呉藍。　なる地震
くわる慈姑　あぢさる紫陽花

（イ）

〔い〕　おいらく老　おいらかに悠然、老樓。　おいぼれ老耄　おいがる老嘎。老イテ聲嗄ルヽコト。
おいかけ綾、老繫。武官ノ菊形ノ飾。冠
くい悔（くゆ）　むくい（むくゆ）報　こい臥（こゆ）
こい凍（こゆ）　はいと隼人。薩隅ニ住ム人種。捷　さゞい榮螺（さゝえ）
○此の外に熟語にて惑ひ易きものの多し。

かれいひ餉、乾飯。　きぬいた砧、衣板（きぬた）。　あさい朝眠
うまい熟睡　おちいる陷入　おとしいる陷入
ひいつ秀出　さいたて戯射、小射立。　等

○又音便にていとなるものの甚多ければ、その惑ひ易きものを擧げむ。

やいば刃、焼刃。　やいと灸、焼庭。　やいばり焼鍼
やいづ焼津（駿河）。　たいまつ松明、焚松。
かい櫂、掻。　かいつぶり鳰、掻潜。　かいぞへ介添、掻添。
かいともし油火、掻燈。　かうがい笄、髪掻、
さいはひ幸　さいぐさ三枝、禍草。　さいたま埼玉

さいなむ叱　さいたづま春ノ制出芽。若草、
ついたて衝立　ついばむ啄、衝食。ついぢ築土
ついがき築墻　ついたち朔、初旬、月立。ついで序、次出。
すいがい透垣　はいずみ掃墨　ふいでう吹革、ふいごう。
ないがしろに蔑、無ガ代。のいずみ肉刺、芒墨、緒摺ノ。まいて況
はいたか鷂鷹。ノ雄、おいて於、置。　ついて就
等
せいたけ背丈セタケ　さいづち小槌サヅチ　ひいき贔負、援引。ヒキ
ひいぢゞ曾祖父ヒヂヾ　ひいばゞ曾祖母ヒバヾ　等
（ウ）〔ひ〕右の外　皆ひなり。

五

發音ウ（う、ふ）。

（甲）語首のウは皆うなり。

（乙）語中語尾のウ（う、ふ）。

（ア）〔う〕

こゝろう心得（こゝろえ）　けうとし氣疎
うう植（うゑ）　うう飢（うゑ）　すう据（すゑ）
くう蹴（くゑ）　ひう毟。細ク切ルコト。（ひゑ）
あきうど商人　おちうど落人　かりうど獵人
めしうど囚人　しうと舅　しうとめ姑
こじうと夫兄弟。ノ　こじうとめ夫姉妹。ノ　ひうが日向
かつうは且。カツハ。

○この外語中、語尾のうは大抵オと發音するが故に、皆

その條に收めたり。

(イ)〔ふ〕右の外皆ふなり。

發音ヱ（え、ゑ、へ）。

六

(甲)語首のヱ（え、ゑ）。

(ア)〔ゑ〕

ゑ繪　ゑどる彩

ゑもとゆひ繪元結、飾元結。　ゑる彫　ゑぐる剜

ゑ（歎詞）　ゑづく嘔吐　ゑど竈

ゑぐし薇　ゑぐ草名　ゑなく呻

ゑぬ狗　ゑのこ豕　ゑふ醉

ゑる嘲　ゑづらかす嘲弄　ゑむ笑

ゑまひ笑貌　ゑましゑまはし可笑　ゑみさかゆ笑榮

ゑみまく笑設　ゑみでつ笑傾　ゑら〳〵笑聲

ゑらぐ笑嘘　ゑがほ笑顔　ゑくぼ靨

ゑむ縛（栗カ）　ゑます嘑（參チ）

ゑ皿　ゑた穢多

ゑり臥、笹。箔ヲ連子ヲ魚ヲ捕ル具。　ゑそ鰛　ゑつ鰆

ゑんぱ蜻蛉　ゑにす桃ゑんじゆ

(イ)〔え〕右の外皆えなり。

(乙)語中、語尾のヱ（え、ゑ、へ）。

(ア)〔え〕

ふえ笛　のどぶえ咽喉

ひえどり鵯ひよどり　ひえ稗　ひえ比叡

ぬえ鵺ぬえごどり　あえかに嬰。危氣。　はえ鮀はや

きのえ甲、木兄。　ひのえ丙、火兄。　つちのえ戊、土兄。
かのえ庚、金兄。　みづのえ壬、水兄。
すみのえ住吉　ほりえ堀江　いりえ入江
みづえ瑞枝　ほつえ上枝　しつえ下枝
ながえ轅。車ノ前ニ出デタル柄。　さすえ陰。柄杓如キモノ。　さゝえ小筒。酒ヲ入ル小器。
さゞえ榮螺さゝい　かもえ上樵、鴨居。
こゝろえ心得（こゝろう）
あえ肖、似。（あゆ）　あえ流汗（あゆか）　あえ熟果（あゆ）
あまえ嬌（あまゆ）　いばえ嘶馬（いばゆ）　いえ癒（いゆ）
おびえ腰（おびゆ）　おぼえ覺（おぼゆ）　れもはえ所思（おもほゆ）
きえ消（きゆ）　きこえ聞（きこゆ）　くえ崩（くゆ）

こえ越（こゆ）　こえ肥（こゆ）　こゞえ凍（こゞゆ）
さかえ榮（さかゆ）　さえ冴（さゆ）　そびえ聳（そびゆ）
そばえ戯（そばゆ）　すえ饐、酸。（すゆ）　たえ絶（たゆ）
つひえ費、潰。（つひゆ）　つえ潰（つゆ）　なえ萎（なゆ）
ぬえ偃、萎。（ぬゆ）　ぬえくさ偃草、萠草。　にえ（にゆ）
はえ生（はゆ）　ひこばえ蘖　ずはえ條
ふえ殖（ふゆ）　はえ榮（はゆ）　みばえ見榮
はえ映（はゆ）　ゆふばえ夕映　ひえ冷（ひゆ）
はえ映（はゆ）　みえ見（みゆ）　まみえ謁、面接。（まみゆ）
もえ燃（もゆ）　もえ萌（もゆ）　もえぎ萌黄
もたえ煩悶（もだゆ）　わかえ若（わかゆ）　をえ痺、衰臥。（をゆ）

○此の外通音にてれがえとなるものあり。

なかえ（所泣たかゆ）　うたえ（所打うたゆ）　しらえ（所知しらゆ）　しのばえ（所忍しのばゆ）　等

（イ）〔ゐ〕

いしずゐ（礎、石居。）　すゐ（居すう）　すゐもの（陶物、居物。）

すゐ（末）　こずゐ（梢木末。）　たなすゐ（手末）

つゐ（杖）　うずゐ（卯杖、正月上卯ニ避邪ノ爲メ簡府ヨリ奉ルモノ。）

さひづゐ（鋸ノ類。）　かせづゐ（杖ノ頭ナルモノ。ノ擅木形）

つくゐ　ともゐ（鞆繪）　ゆゐ（效）

こゐ（聲）　うゐ（飢うう）　うゐ（植うう）

くゐ（蹴くう）　ひゐ（蕋。細ク切ルコト ひう）

（ウ）〔へ〕右の外皆へ　なり。

〔を〕　發音　オ（お、を、ほ、ふ、う）。

（甲）語首のオ（お、を）。

（ア）〔を〕

を小　をとこ少男

をとめ少女　をぢ（小父）えをぢ（伯父、おさをぢ叔父。）　をば（小母）えをば（伯母、おさをば叔母。）

をぢ年長者　をぼこ幼兒　をぐな童男

をみ小忌。大嘗會ノ齋戒ナドヲ云フ。　をづかみ小擾髮。髮ノ延ビ。　をかつら（楓、小桂。）

を男、雄。　をん雄たす　をのこ男子

をとこ夫、男。　をひと夫、をつと、をうと、をひ甥

をがはら牡瓦　をとこへし男郎花　ををし雄

をたけび雄叫　をぢなし臆病

をみな女、婦。たをんな、たをうな、　をなで女子　をんなめ妾

をみなへし女郎花たみなめし

をけ麻笥　をけ桶

をふ麻生　をたまき苧環　をがせ麻桛

を緒　をどす緒、緒通。　をさ筬（機ノ）

を尾　をばな尾花　をはり尾張

をろち蛇、尾張。　をさす建。北斗柄ノ向フコト。　をふ終たはる

を岑　をのへ岑上、山。　をか岡

をか陸　をかしね陸稻　をかとときを桔梗

をか傍　をかひき傍ノ陸引。捕吏テサキ。ク意ヨリ導ナリ。　をかめ傍目

を（歎詞）

をし鶯蹕ノ聲。　をこ痴、烏滸。　を唯たを　を（接續詞）（格詞）

をこがる烏滸なこめく　をかし可笑（可愛賞）　をこがましを痴

をし可愛　をし可惜（くちなし）　をめく叫喚わめく

をしぞり鷺鷥たし　をしふ教訓。　をしむ惜

をそ虚言うそ　をそ獺うそ

をす食　をしね食稻　をもの食物たしもの

をさむ納、收。かさまる　をさむ治、修。たさまる　をさめどの納殿

をさゆづる儲弦　をさ長　をさなし稚

をさ〳〵し怜悧　をさ〳〵大抵　をさめ下司ノ老女。

をぐ招　をぎ荻　をぎ招餌

をぎむし尺蠖　をかたまのき招靈木榊。　をびく誘、招引。
をこづる誘、招釣。　をとり媒鳥、囮。
をち遠方　をちつかた以降　をつ復、回。
をとつひ一昨日たとゝひ　をとつとし一昨年たとゝし
をゆ痒　をる折　をゝる撓
をり折　をしき折敷　をゝかは韋、揉皮。
をれでつ折傾　をがむ拝、折屈。なろがむ　をり節、時。なりふし
をりはふ時延長時。
をり居　をり檻　をぞむ洗濯
をち〳〵蛍　をぞる踊　をこせ瞞たこじ
をけう兆うけら　をの斧　をの〳〵戦慄わなゝく

をつ〳〵現うつゝ　をさぎ兎うさぎ　をざし鮫、魚刺。うをさし
をさ通事。蕃客接スル通譯。　をこたる怠おこたる　をでく動うごく、おごく。
をでめく微動うごめく、おごめく、　をかす犯おかす
(イ)〔お〕右の外皆お|なり。
(乙)語中、語尾のオ(を、う、ふ、ほ)。
(ア)〔を〕
しらを白魚　うを魚いを　うをめ抚いなめ
ひを氷魚　かつを堅魚　かつをむし蚊ノ類
めをとめうと夫婦　ひをむしカゲロフノ類
さつを獵夫、　うはを後夫　いさを勇夫
たけを武夫　みやびを優人
ますらを益荒夫　ををし雄　いさを勇功

いさをし勳功　さをしか樟鹿、牡鹿。　さるをがせ松蘿、ヒカゲノカヅラ。
へを憑ノ脚ニ付クル紐。　はそのを腰帶
みを水脈、澪。　みをつくし澪標　みづを鐙組。鐙ニ釣ル紐
みさを操　さを竿、棹。　からさを連枷。稻扱ニ打ツ具。
あを青　あをむし青蟲　あをうなばら青海原
あをによし青丹吉、奈良ノ枕詞。　あをひとぐさ青人草
あをのく仰あふのく　あをのけざまに仰あふのけざまに
あをむく仰あふむく　あをぬく仰あふぬく
とをむ撓たわむ　たをり峠、撓たわ、たを。　たをやぐ婀娜たわやぐ
たを〳〵と婀娜たわ〳〵と　たをやめ優女たわやめ　たをやかに窈窕たわやかに
とをを撓たわゝに　やをら徐、緩。

たをる手折　つゞらをり九折坂　しをる桀、撓折
しをる萎、凋、撓折。　しをる呵責、撓折。
かをる薫、香居。　まをす申　とを十
てをの手斧　わざをぎ　あをた筬輿。板ニ竹ヲ編ミテ釣トシ昇グ具。
（イ）
〔う〕　こゝろう心得　けうとし氣疎
まうく設　まうく儲、賭、　ゆわう硫黄。湯泡ノ轉訛。
かうち河内　すはう周防
○此の外音便にて、う　となる多し。
るもの甚
くろかう黑皮茸　かうもり蝙蝠　はうき箒
せうど兄人　いもうと妹人　くらうど藏人

まらうど客、稀人。　なかうど仲人
つかうまつる仕奉　なうし直衣
かうつけ上毛　かうべ頭　かうべ神戸
たゝうがみ疊紙　てうづ手水
たかうな笋　かうがへ考　たうげ峠、手向。
ゆかうず將レ行。　まるらうず將レ參
まうづ詣　まうす申　とうで取出
かうばし香細　とう疾　いたう痛
したがうて隨而　れもうて思　等
かうむり冠　はうぶり葬　やうか八日
やうやう漸　等

○此の外ウ、ユと發音するものはその條を見よ。

（ウ）〔ふ〕

あふひ葵　けふ今日　きのふ昨日
あふのく仰　あふむく仰　あふぬく仰
あふぐ扇　あふぐ仰　あふぐ扇
あふぎ扇　あふり翻戸ノ火ヒ　あふり障泥、鞍ヨリ垂レテ防グ泥ヲ皮。
はふる投　たふる倒　おふす生
れふす仰、命。　れふし啞　あふこ初
あふち楝　さふらふ候　たふとし尊
あふみ近江　とはたふみ遠江
そのふ園生　がまふ蒲生　むぐらふ葎生

ふくろふ梟　かげろふ陽炎　てふト言フ。

(エ)〔ほ、ふ〕右の外動詞の語尾(變化するところ)にあるものはふ、その他はほなり。

八　發音　オ列(オ列、ア列)。

(甲)ふの上にある　オ列(オ列、ア列)

(ア)〔オ列〕

かげろふ陽炎　きのふ昨日　そのふ園生

れふす仰、命、おほす　ふくろふ梟　れふし啞

のでふ拭　れふす生おほす　おふけなし過分、頁氣無。

かくろふ隠　とゝのふ整　つぐのふ償

うつろふ移　つくろふ繕

まつろふ奉　しろふ互ニスル意、言ひしろふナド。　はころふ謫

ひろふ拾　のろふ咀

○此の外動詞なれば、その語尾を變化して知ることいと易し。

乞コハズ、タリ、こふ。問トハズ、タリ、とふ。等

(イ)

〔ア列〕

とほたふみ遠江　あふぎ扇　たふとし尊

あふこ朸　はふる投　むぐらふ葎生

さふらふ候　がまふ蒲生

しなふ撓　あげつらふ論　あざなふ糾、縄ナドコト。

すまふ相撲　ねぎらふ勞

まもらふ守　ちらふ散　ならふ知・互ニスル意。しろふ。
やすらふ息　のらふ宣　やらふ遣
なずらふ準なぞらふ

○此の外皆動詞なれば、その語尾の變化・によりて推知すべし。

買カハズ、カヒタリ、かふ。堪タヘズ、タヘタリ、たふ。等

（乙）

うの上にあるオ列（オ列、ア列）。

（ア）〔オ列〕こゝろう心得

○此の外皆音便にて引となれるものなれば、その原字を求め出して知るべし。

いもうと妹人イモヒト　つよう強ツヨク、

こうて請ひテ　等

（イ）

〔ア列〕まうく設　まうく儲、賭、

かうち河内　ゆわう硫黄　すはう周防

○此の外皆音便にて引となれるものなれば、その原字を求めて知るべし。

かたうと方人カタヒト　いたう痛イタク

ちたがうて隨ひてシタガ　くろかう黒革クロカハ

なうし直衣ナホシ　たうげ手向タムケ　等

九　發音ヤ拗音ウ列。皆直音のイ列なり。

いふ言　ちゅふ（ト言フ）　あさぢゅふ淺茅生

しうと舅　かりうど獵人　等

十　發音ヤ拗音オ列。皆直音のエ列なり。

けふ今日　ゑふ醉　てふ（ト云フ）

せうど兄人　けうとし氣疎　等

十一　發音ワ（わ、は）

（甲）語首のワは皆わなり。

（乙）語中、語尾のワ（わ、は）。

（ア）〔わ〕

あわつ狼狽　あわ泡　ゆわう硫黄

さわぐ騒　あわたゞし狼狽　わわく散亂

こわ（こわれ、こわづくり、こわいろ、こわだか、聲）　しわざ仕業　ことわざ諺

ことわる理、辭、　のわき野分　さわやかに爽

たわむ撓（たゞをむ）　ことわり理、辭、　いわけなし幼

よわし弱　たわやかに撓（たゞやかに）　たわやめ嫋女（たゞやめ）

かはわ河回　いわし鰯　みわた水曲

くつわ轡　うらわ浦曲　しまわ島曲

はにわ埴輪　おはわ輔　くるわ廓

はらわた腸　しわ皺　かわく乾

まわた眞綿　さわらび早蕨

たわら（俵、東藁（たばらか））　ひわ　くわる慈姑

（イ）〔は〕右の外は　なり。

十二　發音　ユ（ゆ、う、る、ふ、い）。

（甲）語首のユ（い、ゆ）。

（ア）〔い〕　いく行（ゆく）　いふ言　いめ夢（ゆめ）

（イ）〔ゆ〕右の外皆、ゆ　なり。

（乙）語中、語尾のユ（ゆ、う、る、ふ）。

（ア）〔う〕　うう（うる）植　うう（うる）飢　すう（する）据（すうる）　くう（くる）蹴（くうる）　ひう（ひる）乗（ひうる）

○此の外　あきうど商人（キュウ）　しうと舅（シュウ）　等

はゥの條を見よ

（イ）〔る〕　ひきる半

（ウ）〔ゆ〕　くゆ悔　おゆ老　おゆらく老（おいらく）

こゆ凍　むくゆ報　こゆ臥

あゆ肯、似。　あゆ流（汗か）　あゆ熟（果か）

おびゆ魘　あまゆ嬌　いゆ癒

きこゆ所聞　おぼゆ覺、所思。　おもはゆ所思

にゆ所煮　みゆ所　まみゆ謁

こゆ越　きゆ消　くゆ崩

そびゆ聳　こゞゆ凍　さかゆ榮

そばゆ戯　すゆ餒

たゆ絶　つゆ潰　つひゆ費、潰
なゆ萎　ぬゆ萎、倦　はゆ生
はゆ榮　はゆ映　ひゆ冷
ふゆ殖　はゆ吠　いばゆ嘶
もゆ萌　もゆ燃　もだゆ煩悶
わかゆ若　をゆ瘁

○この外通音にてるのゆとなれるものあり。

なかゆ所泣　いはゆる所謂　うたゆ所打
しのばゆ所忍　等

(エ)〔ゆ、ふ〕右の外動詞の語尾にあるものはふ、その他はゆなり。

十三　發音　ジ（じ、ぢ）。

(ア)〔じ〕

何じもの（鳥じもの、狗じもの等）　何じ（興じ、感じ等）　何んじ（甘んじ、辛うじ等）
あまじゝ（痴、餘肉。）　たじゝ（牛、田獣。）　はじゝ（脯、干シタル肉。曝シ）
いみじ（甚）　おなじ（同）　すさまじ（荒）
みじかし（短）　ときじく（非時）
かたじけなし（忝）　かたじけなむ（忝）
ひじり（聖、叡智。）　いちじるし（著明）
あじろ（網代。檜竹ナドニテアミタル席。）　あじか（資。土ヲ運ブノ類。）

をゞむ縮　をゞまふ蹙　をゞまる蹙

をゞる縮　をゞら纖。生糸ヲ經、練糸ヲ緯トシテ織リ後ニ縮マセタルシウラノナリヌキト云フ。

をゞらぎ絹縮ミ目。　をゞに繁　をゞま無言

をゞみ峴

かじく憔悴　くじく挫　たじろく辟易

まじろく瞬

はじく彈　めはじき充薊　つまはじき爪彈

はじかみ薑　はじむ始

くじる抉　こじる抉　ねこじ根掘

しくじる失敗　かじる噛　ほじる穿

なじる詰　にじる躁　まじる交、混。

まじらふ交　まじはる交　まじふ交、混。

なじむ馴染　つじむ點汚　にじむ丹染

何じむ（田舍じむ、垢じむ、大人じむ等）染

まじり眦まなじり　やじり鏃　こじり鐺（刀ノ）

こじり環、端ノ飾。（タルキノ）

あるじ主人　あるじ饗　むらじ連

まじるもの雜物　まじる遭難、入災。　まじなふ呪、盞行。

うじ蛆　きじ雉　ひつじ羊

つむじ旋風（つじ）　つむじ廻毛（つじ）　うなじ項

とじ刀自　さじ匙子　くじ籤

つじ辻　はじ櫨（はぜ）　にじ虹

ふじ富士　つゝじ躑躅　もじ文字。すもじ、かもじ、わもじ、そもじ。

あをじ青鷺あをしとゞ　かじか蛙ノ一種。　かじか鹿、　かじか鰍

くじか麝　むじな貉　えみじ蝦夷えびす、えぞ。

こじうと小舅　こじうとめ小姑　まじめ眞面目

なまじひに慾　かしき綵、雪中ニ用フル履。　さじき桟敷さすき

（イ）右の外皆ぢなり。

十四　發音ズ（ず、づ）。

（ア）〔ず〕

何ず（與ず感ず等）　ずず不　かならず必

すず鈴　何むず（殺さむず參らむず等）　何んず（甘んず辛うず等）

すずめ雀　すず錫　すずむし鈴蟲

すず篠　すずし涼

すずむ納涼　ずずし生絹　すずろに漫そゞろに

すずろく漫　すずな菘、タウナ。　すずしろ大根

すずしろ髫。童ノ髮チハサミテ少シアマレルモノ。　さずき桟敷さじき　ねずみ鼠

すずり硯　かず數　きず傷

くず國栖　くず葛　うず髮華。冠上ノ飾物。

ゐず百舌　はず弭、箭　はず箸

みゝず蚯蚓　ゆず柚　あんず杏

はねず唐棣、郁李。ニハウメト云フ。　まゆずみ蕊　ずばえ條

こずゑ梢　すずき鱸　こず掘

まず交　いしずゑ礎　うずすまる群集

なずらふ準なぞらふ　ひずむ歪　たゝずむ佇

(イ)〔づ〕右の外皆づなり。

十五　發音　ン（ん、う、む）

(甲)語首のン（む、う）

(ア)〔う〕　うめ梅　うべ宜

うこぎ五茄。（藩木ノ名）うま馬

(イ)〔む〕　むめ梅　むべ宜

むこぎ五茄　むま馬

○この外に紛はしきものなし。

(乙)語中、語尾のン（む、ん）。

(ア)〔む〕　かむ神　かむがふ考

なむぢ汝　きむぢ汝　のむど喉

むてむ、なむ、らむ、（未來ノ助動詞）らむ（推量ノ助動詞）　けむ（過去推量ノ助動詞）

なむ（希望ノ助動詞）　なむ（助詞）

(イ)〔ん〕もとん字の語は無し。然れども音便により「ん」となるものは甚だ多し。

可くんば　行かずんば　眞ん中　等

可かんめり　なんめり　何んぞ

ねんごろに懇　つんざく突裂　かんざし髮搔、簪。

行かん　行きてん　行かなん

なんぢ汝　かんべ神戸　かんつとび

かんながら神隨　等

（假名遣終）

〔設問〕同發音異字の種類を擧げよ。假名遣とは如何なる法ぞ。左の語を假名にて書け。（イ）石、板、今、入、糸、息、從兄弟、言合、思、堺、笑、相互、間違、火入、見舞、長居、古井、（ウ）使、笑、舞、叶、戰、（エ）枝、襟、撰、獲物、干支、江戸繪、訴、宮仕、後邊、支、鍛、上、鼎、差問、女郎花、仕返、繰替、前、苗、蠅、八重、家、贄、（オ）思、行、落着、衰、起、襲、追、壓、鬼、臣、置、老、織、音、己、各、面、凡、顔、猶、庵、鹽、大川、遠山、問人、行事、靜岡、山尾、水獺、早少女（早乙女）、村長、（オ列）戰、仕、行、拂、纏、備、思、仲人、（ヤ拗音）囚人、獵人、夫婦、（ワ）粟、岩、鍬、桑、澤、川、繩、廻、柔、上皮、嶮、御座、添、問、醉、（ユ）目映、痒、結、堪、敎、支、添、（ジ）藤、筋、鯵、味、舵、屑、渦、讓、與、授、携、耻、貧、先以、僅、孰、靜、水、（ン）將

行、惟、考、盛、

第三項。漢字音の假名遣。

㊀ 漢字は凡べて其の音調によりて、之れを平、上、去、入の四聲に分つ。平聲、上聲、去聲の韻尾あるものは必ずイ、ヰ、ウ、ン、ムに終り、入聲は其の韻尾ク、キ、ツ、チ、フに終る。

〔平聲〕灰、惟、東、眞、侵、歌、支、夫、與、科、魚、

〔上聲〕海、壘、董、瑣、感、馬、里、苦、古、火、

暑、

〔去聲〕曳、類、貢、憲、勘、左、地、霧、路、貨、去、

〔入聲〕敵、益、德、吉、合、

㊁ 韻尾のイ、井、平、上、去の三聲に於いて、發聲がア列音又はエ列音なる時は韻尾はイ井にして、ウ列音なる時は井なり。

〔發聲ア列〕韻イ　〔發聲ウ列〕韻井　〔發聲エ列〕韻イ

アイ 愛、哀、　エイ 英、永、

カイ 海、開、　ケイ 計、敬、

サイ 才、細、　ス井 水、燧、　セイ 世、政、

タイ 對、待、　ツ井 追、墜、　テイ 帝、低、

ナイ 內、　子イ 佞、寧、

ハイ 拜、敗、　ヘイ 平、兵、

マイ 每、埋、　メイ 迷、明、

ライ 來、雷、　ル井 類、壘、　レイ 令、例、

ワイ 隈、賄、　ウ井 茴、　エイ 衛、

ガイ 害、概、　ゲイ 藝、迎、

ザイ 財、罪、　ズ井 隨、瑞、　ゼイ 稅、說、

ダイ 大、代、　ヅ井 髮、縋、　デイ 泥、抵、

バイ　倍、買、
クヮイ　會、回、
グヮイ　外、嵬、

ベイ　米、謎、

三　韻尾のウ、フ。入聲の外、に ㇷ なし。

〔平聲〕冬、攻、宗、
〔上聲〕講、擁、董、
〔去聲〕凍、貢、送、
〔入聲〕立、十、納、合、甲、雑、獵、法、

さて入聲のみは韻尾が促音となることを得るものなれば、其の促るか、否かを以て、入聲か、否かを推して、ㇷ か ウ ㇷ かを當つるも便法なり。例へば甲冑、雑誌、合戰、法度、納豆、立派、十國、臘虎、などゝ云ふにて、甲、雑、合、法、等の入聲なることを知りて、之れにカフ、ザフ、ガフ、ハフ、等の假名を當つるが如し。又是等はコッナウ、ゾッシと云はずしてカッナウ、ザッシと云ふが故に、コフ、ゾフに非ずして、カフ、ザフなることをも知るを得べし。

四　キャウ、シャウ、等と キョウ、ショウ 等。所謂漢音にてケイ、セイ等の音あるもの

は吳音にてキャウ、シャウ等とはなれど、キョウ、ショウ等とは成らず。

〔平聲〕兵（ヘイヒャウ）、京（ケイキャウ）生（セイシャウ）英（エイヤウ）明（メイミャウ）丁（テイチャウ）

〔上聲〕餅（ヘイヒャウ）打（テイチャウ）警（ケイキャウ）請（セイシャウ）影（エイヤウ）冷（レイリャウ）

〔去聲〕柄（ヘイヒャウ）敬（ケイキャウ）性（セイシャウ）纓（エイヤウ）命（メイミャウ）定（ヂイジャウ）

㊁　カウ、サウ等とコウ、ソウ等。所謂吳音にてキャウ、シャウ等の音あるものは漢音にてカウ、サウ等とは成れど、コウ、ソウ等とは成らず。又漢音にてキョウ、ショウ等の音あるものは吳音にてコウ、ソウ等、ク、ス等とは

成れど、カウ、サウ等とは成らず。又吳音にてク、ス等の音あるものもコウ、ソウ等、キュウ、シュウ等とは成れど、カウ、サウ等とは成らず。

〔平聲〕庚（カウキャウ）彭（ハウヒャウ）盲（ベウミャウ）瞠（タウチャウ）鎗（サウシャウ）

〔上聲〕梗（カウキャウ）猛（マウミャウ）杏（カウキャウ）膀（サウシャウ）

〔上聲〕更（カウキャウ）硬（ガウギャウ）澂（アウイヤウ）孟（マウミャウ）亨（ハウヒャウ）行（カウギャウ）倀（タウチャウ）

〔平聲〕膺（イヨウオウ）兢（キョウゴウ）興（キョウコウ）

〔上聲〕兢（キョウゴウ）

〔去聲〕凝（ギョウゴウ）應（イヨウオウ）

〔平聲〕庸（イヨウユウ）恭（キョウク）封（ホウフウ）重（ヂョウヂュウ）鍾（ショウシュウ）龍（リョウリュウ）

〔上聲〕擁（ユイヨウ）　洶（キヨウ）　奉（ホウ）　寵（チヨウ）　腫（シヨウ）　隴（リヨウ）
〔去聲〕用（ユイヨウ）　共（キヨウ）　俸（ホウ）　拵（ヂヨウ）　從（シヨウ）　朧（リヨウ）
〔平聲〕公（コウ）　樓（ロウ）　頭（トウ）　浮（フウ）　謀（ボウ）　宗（ソウ）　農（ドウ）
〔上聲〕口（コウ）　吼（コウ）　桶（トウ）　部（ホウ）　剖（ホウ）　塿（ロウ）　總（ソウ）
〔去聲〕偶（グウ）　陋（ロウ）　逗（トウ）　仆（ホウ）　訴（コウ）　綜（ソウ）　瘧（ドウ）
〔平聲〕優（ユウ）　鳩（キユウ）　抽（チユウ）　浮（フウ）　周（シユウ）　劉（リユウ）　由（ユウ）
〔上聲〕有（ユウ）　久（キユウ）　肘（チユウ）　婦（フウ）　首（シユウ）　柳（リユウ）　酉（ユウ）
〔去聲〕憂（ユウ）　舊（キユウ）　晝（チユウ）　富（フウ）　就（シユウ）　溜（リユウ）　狖（ユウ）

〔六〕クヮ等。傀、灰、回、等はヮ拗音の假名クヮイを用ふべし。クヮイ、クヮイ、などゝ書くこと勿れ。

○此の外極めて煩しきが故に、細説することを止む。右に掲げたる外は辭書に就きて看るべし。

〔設問〕漢字音の四聲とは何ぞ。入聲の韻尾は何にて終るか。左の漢字の音を記せ。元帥大抵、海水、久(上)、丘(平)、晝(去)、及(入)、習(入)、攝(津)、恰(好)、集(註)、蟄(居)、經ケイ、星セイ、刑ケイ、令レイ、丁テイ、磅ヒヤウ、膨ヒヤウ、打チヤウ、爭シヤウ、耿キヤウ、嘯シヨウ、澄チヨウ、謬ビヨウ、趣シユ、闕ツ、逢ブ、攻ク、恐ク、統ツ、豐ホウ、赴フ、救ク、冑ヂユ、鏐ル、謬ビユ、宥ユウ、

第四項。語に於ける音の變動。

〔一〕語中の音を變動し又增減することと

あり。之れを音便といふ。音便とは發音の便に隨ひて音を延約し、增減し、變動することを謂ふなり。之れを別ちて六種とす。緩音便、急音便、約音便、延音便、通音便、畧音便、是れなり。

㊂　緩音便。語の調子を緩く、和かにする爲に、語中に「い」又「う」を加へ、或は語中の一音を「い」又「う」に變ふるものなり。

（イ）「い」を加ふる例。

せたけ（背丈）……せいたけ　さづち（小槌）……さいづち

ひき（援引）……ひいき、　ひぢゞ（曾祖父）……ひいぢゞ。

（ロ）「う」を加ふる例。

かむり（冠）……かうむり、　やか（八日）……やうか、

はふり（葬）……はうぶり、　かつは（且）……かつうは、

（ハ）一音を「い」に變ずる例。

やきば（燒刄）……やいば、　たきまつ（焚松）……たいまつ

さきはひ（幸）……さいはひ、　やきと（燒處）……やいと、

はしたか（敏鷹）……はいたか、　まして（況）……まいて、

おきて（於）……おいて、　つきて（就）……ついて。

（ニ）一音を「う」に變ずる例。

いたく（痛）……いたう、　まったく（全）……まったう、

はは|き(箒)……はう|き、　くらひ|と(藏人)…くらう|ど、
したがひ|て(隨)…したがう|て、　おもひ|て(思)……おもう|て、
つかへ|まつる(仕)つかう|まつる、なほ|し(直衣)……なう|し、
かみ|べ(神戸)……かう|べ、　ゆかむ|ずる(將行)ゆかう|ずる、
たかむ|な(筍)…たかう|な、　とり|で(取出)……とう|で、
まる|で(參出)……まう|で。

「せひ|たけ」「やふ|か」「やひ|ば」「むなし|ふす」「れもふ|て」など思ひ誤りて書くべからず。

㊂ 急音便。語の調子を強く、烈しくする爲に、語中に ん| 又 っ を加へ、或は語中の一音を ん| 又 っ に變ふるものなり。

(イ) ん| を加ふる例。

みな(皆)……みん|な、　けづる(削)……けん|づる、
べくば(可)……べくん|ば、　せずば(不爲)……せずん|ば。

(ロ) っ を加ふる例。

またく(全)……まっ|たく、　よたり(四人)……よっ|たり、
はとり(服部)……はっ|とり、　まひらに(眞平)…まっ|ぴらに。

(ハ) 一音を ん| に變ふる例。

つき|さく(突裂)…つん|ざく、　なに|のゆゑ(何故)なん|のゆゑ、
くらひ|と(藏人)…くらん|ど、　れよび|て(及)……れよん|で、
ふみ|はる(踏張)…ふん|ばる、　ほとほ|と(殆)……ほとん|ど、

ゆかむ(將行)……ゆかん、　かむがふ(考)……かんがふ、
ねもごろに(懇)ねんごろに、　さかりに(盛)……さかんに、
よるのねとゞ(夜御殿)……よんのねとゞ、
あるめり(有)……あんめり。

(二)　一音を「っ」に變ふる例。

つきたち(突立)……つったち、　わらひて(笑)……わらって、
もちて(以)……もって、　うちて(討)……うって、
こりて(凝)……こって。

「せずむは」「ふむはる」「もつて」など書き誤らざるやう注意すべし。

四　約音便。語中の二音を、上の音と同行にして下の音と同列なる一音に約むるものなり。例へば、つたへ(傳)を約めてつて と云ふは、てはたと同行にして へと同列なればなり。

さからば(然)……さらば、　ことつたへ(言傳)ことつて、
あはうみ(淡海)……あふみ、　れはくあり(多有)れはかり、
とほつあふみ(遠江)……とほたふみ、
わがいへ(我家)……わぎへ　なかつれみ(中臣)なかとみ。

五　延音便。語中の一音を、原音に同行なるア列(或はオ列)の音と、原音に

同列なるハ行、カ行、又ヲ行の音との二音に延ぶるものなり。例へば、はかる（計）を延べてはからふと云ふは、らは原音るとなる行同ア列音にして、ふは原音るとなる同列ハ行音なれば なり。

むく（向）……むかふ、　うく（浮）……うかぶ、
すむ（住）……すまふ、　かたる（談）……かたらふ、
おにやり（鬼追）…おにやらひ、　ゑみ（笑）……ゑまひ、
ゐはぶき（欵）……ゐはぶかひ、　ねぎ（願）……ねがひ、
まをす（申）……まをさく、　かけむ（將掛）……かけまく、

きく（聞）……きかく、　まつる（奉）……まつらく、
ます（增）……まさる、　よぶ（呼）…よばふ…よばはる、
つくる（作）……つくろふ、　まつる（奉）……まつろふ、
かくり（隱）……かくろひ、　いみ（忌）……いもひ。

六　通音便。

語中の一音を同行或は同列の他の音に變ふるものなり。

（イ）行通音便の例。

あめ（雨）　あまやどり（雨宿）、　あまがさ（雨傘）、
あまだれ（雨垂）、　あまど（雨戸）、
かぜ（風）　かざかみ（風上）、　かざあな（風穴）、
かざをれ（風折）、　かざみぐさ（風見草）、

しろ(白)　しらゆき(白雪)、　しらいと(白糸)、
しらさぎ(白鷺)、　しらが(白髪)、
ひ(火)　ほのほ(火穂)、　ほむら(火叢)、
ほてり(火照)、　ほや(火屋)、
き(木)　このみ(木實)、　こかげ(木蔭)
こずゑ(木末)、　このした(木下)、

(ロ)　列通音便の例。

はるあめ(春雨)……はるさめ、　うし(大人)……ぬし、
しまらく(暫)……しばらく、　みそかに(密)……ひそかに、
ぬぶり(眠)……ねむり、　ともす(點火)……とぼす、
をみなへし(女郎花)…をみなめし、

はなつ(放)……はなす、　けちて(消)……けして、
はしる(走)……わしる、　はつかに(僅)……わづかに、
いはる丶(所謂)…いはゆる、　やかれて(所燒)…やかえて、

(ハ)　略音便。語中の一音を省き去るものなり。ア行の音、ラ行の音、イ列の音、及び鼻音などを省くこと最多し。

ながあめ(霖)……ながめ、　がまれふ(滯生)…がまふ、
かりいほ(假庵)……かりほ、　なるうみ(鳴海)…なるみ、
たらす(足)……たす、　やどり(宿)……やど、
かへるさ(還)……かへさ、　たれ(誰)……た、
をろがむ(拜)……をがむ、　いきひき(息引)いびき(鼾)、

あしふみ(足踏)……あぶみ、　はにし(土師)……はじ、
はやひと(隼人)……はやと、　もちて(以)……もて、
あみしろ(網代)……あじろ、　もんじ(文字)……もじ、
たいめん(對面)……たいめ、　あんない(案内)あない。

〔設問〕音の變動は幾種あるか。緩音便と急音便との別如何。左の語を緩かに、せよ。說きて、透垣、搖遣る、早く、空しく、笑ひて、商人、仲人。左の語を急にせよ。追拂ふ、眞先に、眞中に、非ず、飛びて、立ちて。左の語を約めよ。手洗、國内、聞かせて、消えて、蹴ゑて。左の語を延べよ。足る、隱す、守る、(以上ア列を加ふにして波行)、取らむ、言ひける、聞かぬ、(以上ア列をカ行に加ふして)、

映る、忌む、(以上オ列をハ行に加ふして)。左の語を同行又は同列に通せよ。尊む、悲み、烟。

第二章、語、

第一項、語の種別、

一　語は音を綴り成して、箇々の思想を言ひ表はすものなり。之れを編みて說を作れば、始めて完結せる思想を言ひ表はすことを得。語を書き表はす字は假名を綴りたるものの外に漢字を借り用ふることも多し。

山、川、是れ、彼れ、學ぶ、敎ふ、僅に、且、高き、卑しき、あはれ、なり、けり。

㊁ 語は、之れを種々に用ふるに隨ひて、その形に種々の變化を生ずるものあるなり。

學はず、學びたり、學ぶ、學べし、學べよ。

斯くの如き語の變化を活といひ、活きたる狀態を法といふ。活く語の變ずる部を語尾といひ、變せざる部を語幹といふ。

語幹語尾　語幹語尾　語幹語尾　語幹語尾

まなば、まなび。まなぶ、まなべ、

㊂ 活の有無によりて語を大別して、體言、用言の二種とす。

(ア) 體言とは之れを種々に用ふれども、その語形に變化なき語をいふ。乃ち活かざる語なり。

父、母、吾れ、誰れ、甚、最、

さて、又、故に、あな、あゝ、

が、の、を。

(イ) 用言とは之れを種々に用ふれば、その語形に變化ある語をいふ。乃ち活く語なり。

行ふ
- 行は　む、
- 行ひ　たり、
- 行ふ　なり、

賢し
- 賢く　とも、
- 賢し、
- 賢き　人、
- 賢けれ　ど、

知りたり
- たら　は、
- たり、
- たる　人、
- たれ　ど、

行へ　ども、

四　語の性質により　て　更に　之れ　を　十一種　に　區別す。

(一) 名詞（體言）　(二) 代名詞（體言）
(三) 數詞（體言）　(四) 格詞（體言）
(五) 動詞（用言）　(六) 形容詞（用言）
(七) 副詞（體言）　(八) 助動詞（用言）
(九) 接續詞（體言）　(十) 感動詞（體言）

(十一) 後置詞（體言）

(ア) 名詞は　ものの　名を　言ふ　語　なり。

日本、　人丸、　山、　家、　明治、　心、　行、　德。

(イ) 代名詞は　ものの　名の　代りに　指す　語　なり。

我れ、　其れ、　かしこ、　何、　誰れ。

(ウ) 數詞は　ものの　數を　表はす　語　なり。

ひと　品、　いつ　色、　もゝ　鳥、　いく　代。

(エ) 格詞は　名詞、代名詞の　資格を　表は

す　語　なり。

人　が、　日本　に、　心　を、　彼れ　の。

(オ)　動詞　は　もの　の　動作　を　言ふ　語　なり。

讀む、　行く、　終る、　有り、　思ふ、　樂む。

(カ)　形容詞　は　もの　の　形狀　を　言ふ　語　なり。

多し、　高し、　貴し、　賢し、　樂し、　白し。

(キ)　副詞　は　動作、　形狀　を　形容する　語　なり。

能く、　爲す、　斯く　有り、　遙に　見ゆ、　最　長し、　必　然り、　彌　遠し。

(ク)　助動詞　は　動詞　の　意趣　を　表はす　語　なり。

行き　たり、　落ち　む、　捨て　らる、　見　さす、　死な　まし、　有る　べし。

(ケ)　接續詞　は　語　又　說　を　接續する　語　なり。

書　を　讀み　又　字　を　習ふ。

筆　及　紙。　呼び　且　走る。

兄と弟と有り。猫や犬なぞ。

書を讀み、つゝ道を行く。

花咲けば見む。春くれど花咲かず。

(コ) 感動詞は感動の情を表はす語なり。

あな面白の景色やな。

(サ) 後置詞は種々の語に附きて、種々の意趣を表はす語なり。

雪ぞ降る。面白くはなし。

暫たに待て。人や有る。

設問　活とは何ぞ。語根、語尾とは何ぞ。用言とは何ぞ。體言とは何ぞ。十一品詞の名を云へ。

第二項、語の各論。

第一、名詞。

(一) 名詞はものの名を言ふ體言にして、有形名、無形名の別、固有名、通有名の別あり。

	固有名	通有名
有形	日本、富士山、楠正成、	國、山、人、湖、川、

琵琶湖、泉岳寺。	寺、家、書物、花、石。
無形　明治、弘仁。	心、位、名、德、行、望、學問、富貴、幸。

㊁ 名詞は說の主語となることを得。常に動詞、形容詞と相須つものなり。

人書を讀む。（動）　孝は百事の本なり。（動）　日本國は萬世一系の天皇の統べ給ふべき國なり。（動）　雪は白し。（形）

㊂ 名詞と名詞と結びて複形の名詞を作ることあり。この時は下の名詞の語首はその濁音に變ずること多し。

よこぶえ（横笛）	ならぎく（白菊）		
つりざを（釣竿）	たびびと（旅人）		
たにがは（谷川）	やまだ（山田）		
ふるいけ（古池）	まつやま（松山）		
くさや（草屋）	ひとびと（人々）		
こゑゴ（聲々）	やまゝ（山々）		

之れに對して複形ならぬものを單形といふ。

四　同じき名詞を重ね、又名詞に或る尾語を接ぎて、複形となすときは、其の複數を表はす。

ひと〻〻（人々）　やま〻〻（山々）
くさ〻〻（品々）　くさぐさ（種々）
きんだち（公達）　ともだち（友達）

五　他の語より轉じて名詞と成りたるものの種々あり。

（イ）數詞より來るもの。　一つ、二つ、二十ち、三十ち、二か、七か、八か、ひとり、ふたり、五たり、六たり、七へ、八へ、四つづゝ、十づゝ、

二つめ、七かめ、四たりめ。

（ロ）動詞より來るもの。　喜び、行ひ、歸る、遣りて。

（ハ）形容詞より來るもの。　長さ、賢さ、清げ、嬉しげ。

（ニ）外國の種々の語より來るもの。

第一、第十、五號、八箇、六對、二百三十六、勉强、征伐、入學、益友、德、忠、高山、大川、植物學、米國、米利堅。

六　名詞の、他の語に對する資格を五種に分つ。之れを格といふ。

第一、用主格。　動詞、形容詞の主たる格。
第二、物主格。　名詞、を定限する格。
第三、副用格。　動詞、形容詞を定限する格。
第四、受用格。　動詞を受くる格。
第五、獨立格。　他の語に關係なき格。

花(用主)咲き(動)たり。
櫻(物主)の(名)枝。
人(副主)に(受用)書を(動)送る。
花(用主)美し(形)。
花(物主)の(名)顏、月(物主)の(名)眉。
五十(用主)は(副用)三十(受用)を(動)欺く事(用主)は道に(副用)
より(形)多し。
あ(動)らず。

㊐ 名詞を記すに、他の語より來るものは、その語の規則に據りて相當の送假名を爲すべし。但、送假名無くして慣用せるものは此の限にあらず。

山、川、月、星、人、家。
望み、行ひ、圍み、疲れ、限り、
露けさ。
受取、組合、境、隣、雇人、賃金。

第二、代名詞。

㊀ 代名詞はものの名の代に指して言ふ體言にして、定稱、疑稱の別

あり。

(甲)　定稱とは　ものを定めて言ふものなり。

(乙)　疑稱とは　ものを疑ひて言ふものなり。

人	定稱　近稱　吾れ、私。	疑稱　誰れ、
事物	定稱　中稱　汝、彼れ、彼奴。	何れ、何、どれ。
場所	定稱　遠稱　是れ　其れ　あれ、	いづこ、どこ、
方向	定稱　遠稱　此こ　其こ　あしこ、かしこ。	いづち、どち、
時　日	定稱　近稱　こち　其ち　あち、をち、	
時　年	定稱　近稱　けふ　きのふ　あす　あさて	いつ、
	定稱　近稱　こゝ　をとつ年	

(三)　代名詞は名詞の代に立ちて、說の主語となることを得。又、動詞、形容詞と相須つこと、名詞に同じ。

汝は何處に行く(動)か。

是れは甚美し(形)。

誰れか鳥の雌雄を知ら(動)む。

(四)　代名詞は複形のものといへども、其の爲に下の語の首濁ることなし。

たれかれ、　あちこち、　そこ〳〵、

きのふけふ、　われ〳〵、　どこどこ、

あり。

(甲)　定稱とは　ものを　定めて　言ふも　のなり。

(乙)　疑稱とは　ものを　疑ひて　言ふも　のなり。

定稱	近稱	吾れ、私。
		是れ
		此こ
		こち
		けふ
		一年
	中稱	汝、
		其れ
		其こ
		其ち
		きのふ
		あす
		こゝ
		一年
	遠稱	彼、彼奴。
		あれ、
		あしこ、かしこ。
		あち、をち、
		をとつひ
		あさて
		をとつ年
疑稱		誰れ、
		何れ、何、どれ。
		いづこ、どこ、
		いづち、どち、
		いつ、

人
事物
場所
方向
時　日　年

㊁　代名詞は名詞の代に立ちて、說の主語となることを得。又、動詞、形容詞と相須つこと、名詞に同じ。

汝は何處に行(動)くか。

是れは甚美(形)し。

誰れか鳥の雌雄を知(動)らむ。

㊂　代名詞は複形のものといへども、其の爲に下の語の首濁ることなし。

たれかれ、　あちこち、　そこ〳〵、

きのふけふ、　われ〳〵、　どこどこ、

だれ〳〵。

四　代名詞の複數を表はすことは名詞に準ず。

われ〳〵（吾々）　どこ〳〵（何處々々）
これこれ（此々）　なに〳〵（何々）
われら（吾等）　そこら（其處等）

五　代名詞は名詞の代に立ちて、五種の格あること、名詞に準ず。

我れ（用）は知ら（動）ず。
汝（物主）の家（用主）は何處（副用）にある（動）か。
是れ（受用）を彼れ（副用）に與ふ（動）。

爾（獨立）、臣民。

六　代名詞を記すには、れ、等を送假名とすべし。但、複形のものは慣用に隨ひて之れを省くべし。

我れ、　彼れ、　其の家、　何の物。
我等、　汝達、　何等、　是等、　彼是。

第三、數詞。

一　數詞はものの數を表はす體言にして、常に名詞に冠す。之れに定稱、多稱、疑稱の別あり。

定稱　ひと品、　ふた度、　いつ色、　と

月、はた　年、みそ　文字、もも　夜、ち　代。

多稱　もも　鳥、ち　種、やち　度、よろづ　世。

疑稱　いく　代。

㊁　數詞は或る尾語を接ぎて或るものの數を表はす複形の名詞となること　あり。

個數。ひとつ、ふたつ、はたち、みそぢ、ももち。ちぢ

日數。ふつか。みっか、はつか、もゝか。

人數。ひとり、ふたり、みたり、よたり。

重數。ひとへ、ふたへ、ななへ、やへ。

㊂　數詞を記すには、送假名を要せず。

一月、二とせ、三度（タビ）。

第四、格詞。

㊀　格詞は名詞、代名詞の資格を定むる體言にして、常に名詞、代名詞の下に附く。用主格、物主格、副用格、受用格、獨立格等の別あり。

第一、用主格詞。動詞、形容詞の主たる名詞、代名詞に附くもの。が、は、の。

國(用主)は廣(形)し。
貫之(用主)がいふ(動)。
人(用主)は世を樂(動)む。
花(用主)の咲(動)くらむ。

第二、物主格詞。名詞、代名詞に附くもの。の、が、つ。

瓦(物主)の屋根(名)。
松(物主)が枝(名)
外(物主)つ國(名)
玉(物主)の臺(名)
君(物主)が代(名)
天(物主)つ神(名)

第三、副用格詞。動詞、形容詞を定限する名詞、代名詞に附くもの。と、に、にて、を、へ、をして、して、より、から、まで、にして、して、ゆ。

望みは空しく水の泡(副用)と消(動)え果てぬ。
父を十藏(副用)といふ(動)。
八に二を加(動)ふ。
家に歸(動)る。
此處(副用)に在(動)り。
鯨は魚類(副用)にあら(動)ず。
野(副用)にて遊(動)ぶ。
人(副用)に筆を取(動)らす。
子(副用)をして學(動)ばしむ。
道(副用)を進(動)む。
道(副用)に近(形)し。
筆(副用)にて書(動)く。
東(副用)へ回(動)る。

禍は口(副用)より生(動)ず。沖(副用)から来(動)る。

長崎(副用)まで行(動)く。帯(副用)は褲(副用)より長(形)し。

天にしては日、地にしては君のみなり(動)。

二人(副用)して結(動)ぶ。田子浦(副用)ゆ打出(動)て。

第四、受用格詞。動詞を受くる名詞、代名詞に附くもの。を。

犬(受用)を打(動)つ。地(受用)を踏(動)む。

第五、獨立格詞。呼び掛けたる名詞、代名詞に附くもの。よ、や。

汝等(獨立)よ。太郎(獨立)や。

第五、動詞。

(二)動詞は、ものの動作を言ふ用言にして、其の中に、所作を言ふもの、有様を言ふもの、存在を言ふもの、意思を言ふもの等あり。

所作。讀む、行く、語る、取る、教ふ。

有様。きゆ、輝く、富む、終る、濕ふ。

存在。有り、居り、侍り、おはす、います。

意思。　思ふ、望む、喜ぶ、憐む、覺る。

三　動詞は說の說語となることを得。常に名詞、代名詞と相須つものなり。

人(名)書を讀む。　人(名)は有りや。
花(名)咲く。　草(名)生ず。
我(代)れは よく知る。　誰(代)れが然言ふか。

四　動詞と他の語と結び、又他の語に尾語を接ぎて、複形の動詞を作ることあり。

打ち破る、搔き拂ふ、思見る、血迷ふ、逆登る、戸閉す、論ず、大人じむ、哀がる、時めく、氣色ばむ。

四　動詞を自動詞、他動詞の二種に別つ。

(ア)　自動詞は動作が直接に他を處分する意なき者なり。故に、その動作を受くべき受用格の名詞、代名詞有ることなし。

人有り。　人友と家に有り
犬飢う。　犬疾く道を走る。

(イ)　他動詞は動作が直接に他を處分するの意の者なり。故に、其の動作を受くべき受用格の名詞、代名詞を要す。之れを補語といふ。

人書(受用)を讀む。人家(受用)を作る。

我れ常に古の賢人、哲士の事(受用)を思ふ。

五　動詞の活は正活五種、變活四種あり。正活は四段活、上二段活、下二段活、上一段活、下一段活、變活はカ行變活、サ行變活、ナ行變活、ラ行變活なり。

六　四段活は語尾がア列、イ列、ウ列、エ列の四音に活きて、四變形あるものなり。この活に屬する語千に近し。

	語根	語尾 ア列	イ列	ウ列	エ列
カ行	行(ユキ)、置(オク)	か	き	く	け
ガ行	砥(トガ)、嗤(アザケ)、扇(アオグ)	が	ぎ	ぐ	げ
サ行	推(オシ)、增(マシ)、越(コエ)	さ	し	す	せ
タ行	打(ウチ)、待(マチ)、勝(カチ)	た	ち	つ	て
ハ行	添(ソヘ)、問(トハ)、買(カヒ)	は	ひ	ふ	へ
バ行	呼(ヨバ)、及(オヨビ)、結(ムスブ)	ば	び	ぶ	べ

マ行　讀（富、染）　―ま　―み　―む　―め
ラ行　切（取、散）　―ら　―り　―る　―れ

○口語にても行かう（行かむ）などいふ外之れに異なることなし。

七　上二段活は語尾がイ列、ウ列の二音に活き、そのウ列音は「る」「れ」を附け活きて、四變形あるものなり。この活に屬する語は百に足らず。

語根	語尾	
カ行　生（起、盡）	イ列	―き
	ウ列	―く
	同	―くる
	同	―くれ

ガ行　過（和）	―ぎ	―ぐる　―ぐれ
ザ行　掘	―じ	―ずる　―ずれ
タ行　落（朽、哭）	―ち	―つる　―つれ
タ行　耻（閉、攀）	―ぢ	―づる　―づれ
ハ行　生（强、戀）	―ひ	―ふる　―ふれ
ハ行　忍（媚、佗）	―び	―ぶる　―ぶれ
マ行　浴（恨、試）	―み	―むる　―むれ
ヤ行　老（報、悔）	―い	―ゆる　―ゆれ
ラ行　下（懲、許）	―り	―る　―れ

○口語にては生きる、生きれば と、イ列音にられを附くるが故に、誤る

べからず。

八　下二段活は語尾がウ列、エ列の二音に活き、そのウ列音はるれを附けて活き、亦四變形あるものなり。この活に屬する語殆五百に近し。

語根　語尾

ア行	得	心、得	エ列 —え	ウ列 —うる	同	同
カ行	明	避、分	—け	—く	—くる	—くれ
ガ行	擧	投、下	—げ	—ぐ	—ぐる	—ぐれ
サ行	失	伏、似	—せ	—す	—する	—すれ
ザ行	混		—せ	—ず	—ずる	—ずれ
タ行	立	捨、隔	—て	—つ	—つる	—つれ
ダ行	出	愛、奏	—で	—づ	—づる	—づれ
ナ行	兼	列、重	—ね	—ぬ	—ぬる	—ぬれ
ハ行	與	答、堪	—へ	—ふ	—ふる	—ふれ
バ行	延	比、並	—べ	—ぶ	—ぶる	—ぶれ
マ行	諫	弘、治	—め	—む	—むる	—むれ
ヤ行	覺	消、燃	—え	—ゆ	—ゆる	—ゆれ
ラ行	流	崩、倒	—れ	—る	—るゝ	—るれ
ワ行	植	飢、蹴	—ゑ	—う	—るう	—うれ

○口語にては、明ける、明ければとエ列

音に引れを附くるが故に誤るべからず。

㊇ 上一段活の動詞はイ列音一つより成る語にして、その活はイ列音と、之れに引れを附けたるものと、三變形あるものなり。この活に屬する語は十二、三に過ぎず。

語根	語尾
カ行〔着〕	イ列同
ナ行〔似（煮）〕	き同
	きれ
	にる
	にれ

ハ行〔乾（干　嚏）〕　ひ　ひる　ひれ
マ行〔見〕〔惟（オモン）〕　み　みる　みれ
ヤ行〔射（鑄、沃）〕　い　いる　いれ
ワ行〔居（率、鰹）〕　ゐ　ゐる　ゐれ

但し、一音の語にあらずして、一段活に屬するものあれども、それは一段活の語との複形動詞なり。

惟（オモヒ）（思見）　―み　―みる　―みれ
率（ヒキ）（引率）　―ゐ　―ゐる　―ゐれ

㊈ 下一段活の動詞はエ列音一つより成る語にして、その活はイ列音と

之れに「る」、「れ」を附けたるものと、三變形あるものなり。「蹴る」の一語之れに屬す。

語根	語尾
カ行〔蹴〕	ケ列　同　同 け　ける　けれ

○「蹴る」はもと下二段なれども、早く斯う變りき。一語の爲に正活を一種置くは奇なれど、暫改めず。

十一　カ行變活はカ行のイ列、ウ列、オ列の三音に活き、そのウ列音は「る」、「れ」を附け活きて、五變形あるものなり。「く（來）」の一語之れに屬す。

語根	語尾
カ行〔來〕	オ列　こ イ列　き ウ列　く 同　くる 同　くれ

○口語にては「來る」といふべきをも「來る」といふの外異なることなし。特に四段活に屬する「來る」とこれとを混同すべからず。

十二　サ行變活はサ行のイ列、ウ列、エ列

の三音に活き、そのウ列音はる、れを附け活きて、五變形あるものなり。

す(爲)、御座すの二語之れに屬す。

語根　サ行〔爲〕(御座)

語尾　エ列　イ列　ウ列　同　同
せ　し　す　する　すれ

○口語にては爲といふべきを爲ると云ふの外異なることなし。

特に四段活に屬する爲すとこの爲と混同することなれ。又四段活の座す、御座す、大座す、座す等

とこの御座すとを混同すべからず。

外國語の、爲と合して動詞となるものは、皆この活に屬す。

語根　サ行　啓(拜)誅　ザ行　獻(命)感

語尾　エ列　イ列　ウ列　同　同
せ　し　す　する　すれ
せ　じ　ず　ずる　ずれ

○口語にては感じる、獻じれば、など、イ列音にる、れを附くることあれば、誤らぬ樣、注意すべし。

十三　ナ行變活は　ナ行の　ア列、イ列、ウ列、エ列の四音に活き、その　ウ列音は「る」を附け活きて、六變形あるものなり。

往ぬ、死ぬ、の二語之れに屬す。

語根

ナ行　往（死）―な　―に　―ぬ　―ぬる　―ぬれ　―ね

語尾

ア列　イ列　ウ列　同　同　エ列

○口語にては　死ぬ、往ぬ　といふべきを　死ぬる、往ぬる　といふ外、異なることなし。

特にサ行變活の　死す（外來語と爲すとの熟形動詞）とこの

死ぬ　と　を　混同する　こと　勿れ。

十四　ラ行變活は　ラ行の　ア列、イ列、ウ列、エ列に活きて、四變形あるものなり。

有り、居り、侍り、いまそかり、の四語之れに屬す。この活の四段活に異なる點は彼れは「花散る。」「天知る。」とウ列音にて斷り、是れは「人有り。」「臣侍り。」とイ列音にて斷るにあり。

語根

ラ行　有（居侍）

語尾

ア列　イ列　ウ列　エ列

―ら　―り　―る　―れ

○口語にては有りといふべきを、四段活の如く、有るといふ外、異なることなし。一段活の居ると、この居りとを混ずべからず。

有りは と、に、くと約合して、たり、なり、かりと成ることあり。よく分ち、心得べし。

臣は臣たり。（と あり）

吾れも人なり。（に あり）

波靜なり。（靜に あり）いと多かり。（多く あり）

十五　動詞の活を知りたる後、某の語は何活に屬するかを知るには、下一段及び變活はその活き方を知ると共に、その語も自ら覺えらるゝが故に、別に法を要せず。

さて、殘りの正活四種に屬する語を檢するに、口語にて否定の形を作りて、その語尾ア列なれば四段、エ列なれは下二段、イ列にして一音なれば、一段、二音以上なれば上二段と定むるなり。

行かず（行かヌ）ア列　四
ナイ　行か

段活

起き　ず（起き　ナイ　起き　ヌ）イ列　上
二段活

受け　ず（受け　ナイ　受け　ヌ）エ列　下
二段活

着　ず（着　ナイ　着　ヌ）イ列　一
段活

十六　動詞の種々の活に於いて生ずる法を六種とす。未然法、連句法、斷止法、連體法、已然法、命令法、是れなり。

第一、未然法。　動作を未だ言ひ定めざる法なり。

行か（未來）む、　落ち（否定）ず、　捨て（推量）まし、
着（希望）なむ、　問は（被動）ば、　往な（否量）じ、　有ら（使動）しむ、　爲（被動）らる。

第二、連句法。　動作を言ひさして、他の句に連なる法なり。

燕去り、雁來る。
夙に起き、夜半に寐ぬ。
花咲き、鳥啼き、草生ひ、木茂る。

第三、斷止法。　動作を言ひ斷る法なり。

人行く。　花落つ。　人幸を受く。

人來。彼れよく爲。人有り。

第四、連體法。名詞、代名詞、に連なる法なり。

行く(名)道、落つる花、幸を受くる時、(名)蹴る鞠、(名)來る彼れ。(代)

第五、已然法。動作を已に言ひ定めて、他の句に接續する法なり。

人行けば、吾れも行く。

見れども、見えず。打てば、響く。

春來れど、花咲かず。

第六　命令法。動作を命令する法なり。

疾く行け。早く起きよ。

之れを受けよ。汝、來よ。

君の爲に死ね、幸く有れ。

十七　動詞の九種の活に六種の法を當つれば、左の如し。

活＼法	未然法	連句法	斷止法	連體法	已然法	命令法
四段活	行か	行き	行く	行く	行け	行け
上二段活	起き	起き	起く	起くる	起くれ	起き
下二段活	捨て	捨て	捨つ	捨つる	捨つれ	捨て
上一段活	着ず	着て	着る	着る	着れ	着て
下一段活	蹴ず	蹴て	蹴る	蹴る	蹴れ	蹴て
カ行變活	來ず	來て	來る	來る	來れ	來て
サ行變活	爲ず	爲て	爲る	爲る	爲れ	爲て

ナ行變活	往な	往に	往ぬ	往ぬる	往ぬれ	往ぬ
ラ行變活	有ら	有り	有り	有る	有れ	有れ

十八　動詞を記すには其の語尾を送假名とす。他の語より來るものは元の語の規則による。送假名無く慣用せるものは此の限にあらず。

讀む、書く、教ふ、落つれば、授くる時、來れど、氣色ばむ、嬉しがる、春めく、取扱ふ、相成る、打笑ふ。

第六、形容詞。

一　形容詞はものの形容をいふ用言にして、形體をいふもの、性質をいふもの、等あり。

形體。高し、遠し、太し、厚し、多し、繁し、廣し。

性質。早し、永し、白し、清し、冷し、強し、固し、尊し、善し、珍らし、勇まし、逞まし、賢し。

三　形容詞は說の說語となることを得。常に名詞、代名詞と相須つことと動詞に同じ。

吾が國體(名)は極めて尊し。
水(名)清し。　彼(代)は賢し。

三　形容詞は他の語より來り、又他の語と結びて、複形語を作ることあり。

誠し、愛らし、大人し、男らし、鬼々し。
青白し、細長し、長長し、遠遠し。
羨まし、喜ばし、有り難し、住み憂し。
人がまし、烏滸がまし。

四　形容詞の活は二種あり。久活、志久活、是れなり。

(ア)　久活は語尾がく、し、き、けれと活きて四變形あるものなり。

語根	語尾
久活　深(清、高)	―く　―し　―き　―けれ

○口語にては深い深う、深いけれど、などいふなり。

(イ)　志久活は語尾が○く、き、けれ、と活くものにして、語根がしにて終る語に限れり。

語根	語尾
志久活　嬉し(樂し)	―く　―　―き　―けれ

○口語にては樂しい、樂しう、樂しいけれど、などいふなり。

五　形容詞の活に於いて生ずる法を五種とす。未然法、連句法、斷止法、連體法、已然法、是れなり。

第一、未然法。形容を未だ言ひ定めずして、他の句に接續する法なり。

河深くは、渡らじ。

悲しくとも、泣かず。

第二　連句法。形容を言ひさして、他の句に連なる法なり。

山高く、水清し。

春は樂しく、秋は悲し。

第三、斷止法。形容を言ひ斷る法なり。

山高し。　春は樂し。

秋はいと悲し。

第四、連體法。名詞、代名詞に連なる法なり。

高き山(名)　深き瀬(名)　樂しき時(名)

風寒き日(名)。

第五　已然法。形容を已に言ひ定めて、他の句に接續する法なり。

河深けれ　は、吾れ　は　渡ら　ず。
花　美しけれ　ど、其　の　數　多く　あら
ず。

㈥　形容詞　の　二種　の　活　に、五種　の　法
を　當つれ　は、左　の　如し。

活法	未然法	連句法	斷止法	連體法	已然法
久活	深く	深く	深し	深き	深けれ
志久活	嬉しく	嬉しく	嬉し	嬉しき	嬉しけれ

㈦　形容詞　を　記す　に　は　久活　は　語尾　を、
志久活　は　し　と　語尾　と　を　送假名　と
す。他　の　語　より　來る　もの　は、元　の

語　の　規則　に　準ず。　複形語　に　は　慣用
の　まゝ　に　送假名　を　略く　こと　あり。
白し、白く、白き、白けれ、正し、正しく、
羨まし、羨ましく、羨ましき、羨ましけれ、
喜ばし、愛でたし、憎らし、愛らし、有難
し、傍痛し、賴もし。

第七　副詞。

㈠　副詞　は　動作、形容　を　形容する　體言　に
して、常に　動詞、形容詞　及び　副詞　に　副ふ。
之れ　に　程度　を　いふ　もの、性狀　を　いふ
もの　等　あり。

程度。最善(形)し。皆散(動)る。殊に然(動)り。

必行(動)く。全く清(形)し。漸遠(動)かる。

彌烈(形)し。皆(副)共に行(動)く。最(副)屢

移(動)る。彌僅(副)に成(動)る。只獨(副)坐(動)

す。

性狀。斯く云(動)ふ。宜富み榮(動)ゆ。願はく

は行(動)くな。試に見(動)よ。いかで知(動)らむ。

彌(副)遠く行(動)く。いと懇に待(動)ふ。

斯く早く走(動)る。豈能く然あら(動)ず。

む。極めて爽に述(動)ぶ。既に遲(形)し。

常に早(形)し。折々吹き(動)來る。

三　副詞を記すには、他の品詞より

來れるものは其の規則に據り、猶

紛らはしきものは語末の一音を送假

名とすべし。

總べて、就きては、果して、願くは、

豫ねて、長く、遠く、能く、勇まし

く、珍らしく、烈しく、正に、常に、

幸に、誠に、先に、互に、折々、

軈て、遙に、靜に、僅に、漸く、

豫め、嘗て。

第八　助動詞。

〔一〕助動詞は動詞の意趣を表はす、用言にして、常に動詞及び助動詞の下に附く。之れには動作の移轉、其の尊敬、其の時、其の量定、其の詠歎を表はすもの等あり。

〔二〕移轉の助動詞。

(一)使動。動作を爲さしむる意趣を表はすもの。す、さす、しむ。

人に書を讀ます。僕に捨て知らしむ。

(二)被動。動作を受くる意趣を表はすもの。る、らる。

賊捕へらる。吾れ雨に降らる。此の筆は猶用ひらる。人に打たる。

〔三〕尊敬の助動詞、

(三)尊敬。動作を尊む意趣を表はすもの。す、さす、しむ、る、らる。

徐に歩ませ給ふ。笠置に落ち給ひしめき。東門の額も御自ら書かしめ給ひき。君書を讀ま

る。　公、かく仰せらる。

四　時の助動詞。

(四)　全現在。　動作完了して現在せる意趣を表はすもの。

花咲けり。　彼れは勉強せり。

雪降りたり。　大木倒れたり。

(五)　小過去。　動作僅に過ぎ去りて、現在より遠からざる意趣を表はすもの。

つ、ぬ。

雨降り出でぬ。　今歸りつ。

(六)　本過去。　動作の過ぎ去りたる意趣を表はすもの。

昔男ありけり。

然る事古は無かりき。

鎌足專之れを助けたり。

(七)　小未來。　動作やがて來らむ程に、現在に近き未來の意趣を表はすもの。

てむ、なむ。

雨やがて降り出でなむ。

とく行きてむ。

(八)　本未來。　動作の未だ來らざる意趣を表はすもの。

む。

此の空いつ晴れむか。

吾れは來月より上京せむ。

㊀ 量定の助動詞。

(九) 決定。動作を定め言ふ意趣あるもの。なり。

之れは人を導く(動)なり。

(十) 推量。動作を種々に推し量る意趣あるもの。めり、べし、らし、まし、らむ。

翁笑ふ(動)めり。

人は道を行ふ(動)べし。

山には時雨降る(動)らし。

花の散る(動)らむ。かはらぬ松ぞ

あるじならまし(動)。

(十一) 過去推量。動作の過去を推し量る意趣あるもの。けむ。

いづち行き(動)けむ。汝れが生れ(動)けむ年。

(十二) 否量。動作の然らざるを推し量る意趣あるもの。じ、まじ。

それは然(動)らじ。夏も氷絶ゆ(動)まじ。

(十三) 否定。動作の然らざるを定め言ふ意趣あるもの。ず、ざり。

人行(動)かず。また見(動)ざるなり。

六　詠歎の助動詞

十四　詠歎。動作を詠め言ふ意趣あるもの。けり。

都は春の錦なり(動)けり。

七　助動詞の活は、動詞、形容詞のに同じきと、然らざると、種々あり。又其の活に於いて生ずる法も、動詞、形容詞のに同じきと、稍異なると、あり。左の如し。

活語＼法	未然法	連句法	斷止法	連體法	已然法	命令法
下二段活 す 使動、尊敬、さす使動、尊敬、しむ使動、尊敬、る 被動、尊敬、らる被動、尊敬、つ 小過去	せ させ しめ れ られ て	せ させ しめ れ られ て	す さす しむ る らる つ	する さする しむる る らるる つる	すれ さすれ しむれ るれ らるれ つれ	せ させ しめ れ られ て
ナ行變活 ぬ 小過去	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね
ラ行變活 り 全現在 たり 全現在本過去 けり 本過去 なり 決定 ざり 否定	ら たら けら なら ざら	り たり けり なり /	り たり けり なり ざり	る たる ける なる ざる	れ たれ けれ なれ ざれ	/ たれ / / ざれ
久活 べし 推量	べく	べく	べし	べき	べけれ	/
志久活 まじ 否量	まじく	まじく	まじ	まじき	まじけれ	/

類	助動詞						
雜活	ず　否定	ず	ず	ず	ぬ	ね	/
	き　本過去	（せ）	/	き	し	しか	/
	まし　推量	（ませ）	/	まし	まし	ましか	/
	らし　推量	/	/	らし	らし	らし（らしき）	/
不完ラ行變活	めり　推量	/	/	めり	める	めれ	/
	けり　詠歎	/	/	けり	ける	けれ	/
不完四段活	む　本未來	/	/	む	む	め	/
	てむ　小未來	/	/	てむ	てむ	てめ	/
	なむ　小未來	/	/	なむ	なむ	なめ	/
	らむ　推量	/	/	らむ	らむ	らめ	/
	けむ　過去推量	/	/	けむ	けむ	けめ	/

四　助動詞が動詞、助動詞の下に附くには、左の規則によるべし。

（ア）未然法に附くもの。

す。　（四段、ナ變、ヲ變）

行かす。　往なす。　有らす。

さす。　（上二段、下二段、上一段、下一段、カ變、サ變）

起きさす。　捨てさす。　着（キ）さす。

蹴（ケ）さす。　來（コ）さす。　爲（セ）さす。

しむ。　（諸活）

行かしむ。　起きしむ。　捨てしむ。

爲（セ）しむ。　有らしむ。　往なしむ。

る。　（四段、ナ變、ヲ變）

行かる。　往なる。　有らる。

らる。（上二段、下二段、上一段、下一段、カ變、サ變）

受け　らる。　起き　らる。　蹴　らる。

來　らる。　讀ま（助、下二）せ　らる。

む。（諸活）

行か　む。　見　む。　爲　む。　來　む。

打た　れ（助、下二）む。　捨て　ざら（助、ラ變）む。

まし。（諸活）

起き　まし。　來　まし。　有ら　まし。

有り　な（助、ナ變）まし。　見　たら（助、ラ變）まし。

ず。（諸活）

捨て　ず。　着　ち　させ（助、下二）ず。　爲　しめ（助、下二）ず。　落

ざり。（諸活）

行か　ざり　き。　着　ざる　なり。　爲

ざり　けり。

じ。（諸活）

起き　じ。　見　じ。　來　じ。　知ら　せ（助、下二）

じ。　捨て　られ（助、下二）じ。

（イ）連句法に附くもの、

つ。（諸活）

聞き　つ。　捨て　つ。　爲　つ。　捕へ

られ(助、下二)つ。

ぬ。(ナ變の外、諸活)降りぬ。消えぬ。來ぬ。

たり。(ラ變の外、諸活)咲きたり。見たり。成り(助、ナ變)にたり。來たり。落ちたり。

けり。(諸活)起きけり。捨てけり。爲けり。見て(助、下二)けり。行き(助、ナ變)にけり。

き。(諸活。但、カ變にては、き なく、し しか 未然、連句、兩法に附き、サ變にては、き は連句法に、し しか は未然法に附く。)

讀みき。捨てし人。有りき。散り(助、ナ變)にき。來し方。來しかば。來しかば。爲し人。來し人。御座せしかど。勉强しき。

けむ。(諸活)推しけむ。見て(助、下二)爲けむ。有りけむ。

けり(詠)(諸活)錦なりけり。咲き(助、下二)にけり。

(ウ) 斷止法に附くもの。

めり。(諸活。但、ラ變には連體法)

行くめり。　來めり。　有るめり。

爲るなるめり。(助、ラ變)

べし。(諸活。但、ラ變には連體法。)

咲くべし。　見るべし。　有るべし。

爲さるべし。(助、ラ變)

らし。(諸活。但、ラ變には連體法。)

受くらし。　來らし。　咲きにけるらし。(助、ラ變)

らむ。(諸活。但、ラ變には連體法。)

行くらむ。　爲らむ。　往ぬらむ。

見つらむ。(助、下二)　何處なるらむ。

まじ。(諸活。但、ラ變には連體法。)

落つまじ。　有るまじ。　爲まじ。

(エ) 連體法に附くもの。

なり。(諸活)

咲くなり。　受くるなり。(助、下二)　爲るなり。

有るなり。　見つるなり。(助、下二)　落ちけるなり。(助、ラ變)

(オ) 已然法に附くもの。

り。(四段、サ變。但、サ變にては未然

法。）

咲けり。　降れり。　爲り。　論せり。　御座せり。

第九、接續詞。

㊀ 接續詞は語或は說を接續する體言にして、常に語或は說の間、或は下に在り。

米及び水あり。

遠く又近く見ゆ。

父と母とは親なり。

一位より五位までは勅授なり。

水清く、且冷し。

雨降りて、風吹く。

山高くして、水清し。

我れはペン或は筆を要す。

雨降り若しくは、風吹くべし。

人歩みつゝ、花を見る。

鳥啼きながら、飛ぶ。

春來るごとに、花咲く。

春の雪は降る乃ち、消ゆ。

風吹くまにまに、紅葉散る。

櫻は咲けば、散る。

人勉めば、國榮えむ。

人花を、見に、山に上る。

日出づ。故に、窓明し。

べしは動詞の斷止法に附く。但、

ラ行變活には連體法に附く。

熊谷直實法師と成りき。抑、彼れ

は賴朝公に仕へて、……。

彼れは譏られど、怒らず。

人は行けども、我れは行かず。

日暮るとも、人は歸らじ。

我れは歸り來しが、いと心殘り

なりき。

友は痛く勸むるを、彼れ敢へて

聽かず。

然云ふものゝ、猶棄て難き所あり。

㊂ 接續詞を記すには、紛ひ易きものは

送假名を附け、他の語より來るもの

は其の語の規則に準ふべし。

但、抑、又、且、乃ち、毎に、故に、然れ

は、及び、或は、若しくは、並びに。

第十、感歎詞

㊀ 感歎詞は感歎の情を表はす體言

にして、語或は說の始、終或は間に在り。

あはれ、月の面白きことよ。

あな、面白の景色やな。

やよや、待て、山郭公、言づてむ。

難波津に咲くやこの花。

夜もすがら見てを明かさむ、秋の月。

白露を玉にも貫ける春の柳か。

百敷の大宮ぞころ見れば悲しも。

あつぱれ、無雙の勇士かな。

花の色はうつりにけりな。

如何は爲むは。

いざ諸共に見に行かむ。

いで疾く爲遂げてむ。

來て見よかし。

㊁ 感歎詞は漢字にて記す時は多く送假名を用ひず。

噫、嗚呼、天晴、哉。

第十一、後置詞。

㊀ 後置詞は種々の意趣を表はす體言

にして、常に種々の語の下に附くものなり。之れに強抑、殊別、孤獨、對比、添加、總括、疑問、希求、禁止、等の種類あり。

(ア) 強抑の意趣あるもの。ぞ、なむ、し。

雪ぞ降りける。危くぞある。

人丸なむ歌の聖なりける。

斯くなむ云ひつる。

花をし見れば物思ひも無し。

(イ) 殊別の意趣あるもの。は、こそ。

さこそは有りけめ。

人こそ爲れ、我れは爲じ。

斯かる事も稀には爲し試みよ。

(ウ) 孤獨の意趣あるもの。のみ、ばかり、だけ。

さのみ有るべきに有らず。

歸りたるは三人のみなりき。

俊寛ばかり殘こされたり。

命だけ助かりぬ。

(エ) 對比の意趣あるもの。だに、すら。

訪はずとも音づれだにせよ。

暫時だに打ち息まむ。

犬猫すら恩を知るを。

君の命にすら背きたり。

(オ) 添加の意趣あるもの。も、さへ、までで。

草も木も皆枯れ果てたり。

一人もなし。さる例もあり。

雨痛く降るに、風さへ吹き出でぬ。

花咲き、鳥啼き、蟲螻までも躍り出づ。

(カ) 総括の意趣あるもの。など。

穀物は米、麥、粟、豆などなり。

(キ) 疑問の意趣あるもの。か、や、ぞ。

人か、木の影か。何か有る。

多きか、少きか。有るか、無きか。

善しや、悪しや。知るや知らず

や。

人や有る。是れは何ぞ。

いかでか背かむ。貪くべきかは。

鶯に劣らましやは。

唯に死なむ。

(ク) 希求の意趣　あるものの。　が、もが、もがな、がな、もがもな、なむ、しが、な、はや。

善き薬もがな。　長くもがな。

何がな。　常にもがもな。

疾く咲かなむ。　訪ひ來なむ。

人に見せばや。　聲を聞かばや。

遊び暮らさな。　紅葉を手折らな。

旅寢してしが。　ます鏡見しが。

(ケ) 禁止の意趣　あるもの。　な、な……そ。

花を折るな。　必ず爲な。

武藏野は今日はな燒きそ。

㊁ 後置詞は漢字にて記す事稀なれども多く送假名を用ひず。

も　其の時は　名　計り、丈、耳、而已、迄、乎、勿、莫。

設問　名詞の格とは何ぞ。複形とは何ぞ。複數とは何ぞ。格は幾種あるか。代名詞とは何ぞ。其の種類を擧げよ。數詞とは何ぞ。數詞の常に在る位置を問ふ。數詞の種類を擧げよ。格詞とは何ぞ。其の位置を問ふ。其の種類を問ふ。各種の例を示せ。動詞とは何ぞ。自動詞、他動詞の別を問ふ。其の例を示せ。其の活は幾種有るか。四段活とは何ぞ。上二段活とは。下二段活とは。上一段活とは。下一段活とは。カ行變活とは。サ行變活とは。ナ行變活とは。ラ行變活とは。左

の語は何活に屬するか。行く、消ゆ、居り、爲す、來る、論ず、勉強す、着る、恨む、添ふ(何ヲ)、添ふ(何ニ)、薙ぐ、御座す、開く、聞こゆ。動詞の法は幾個あるか。左の語の活き方を法に當てて示せ。行く、落つ、ゆ、見る、蹴る、來、爲、往ぬ、有り。四段活とラ行變活消との別如何。形容詞とは何ぞ。久活とは何ぞ。志久活とは何ぞ。形容詞の法は如何。左の語の活き方を法に當てて示せ。清し、面白し、冷し、遠し、淋し、羨し、長し、長々し。副詞とは何ぞ。其の位置を問ふ。助動詞とは何ぞ。其の位置を問ふ。其の種類を問ふ。左の語の活き方を法に當てて示せ。つ、らる、ぬ、き、たり、らし、まし、まし、す、む、なむ、と。未然法に附く助動詞を擧げよ。きの附き方を云へ。連句法に附く者を擧げよ。斷止法に附くものを擧げよ。連體法に附くものを擧げよ。已然法に附くものを擧げよ。接續詞とは何ぞ。其の位置を問ふ。其の例を示せ。感歎詞とは何ぞ。其の位置を問ふ。其の例を示せ。後置詞とは何ぞ。其の位置を問ふ。其の例を示せ。種類を問ふ。其の例を示せ。

第三章、說。

第一項、說の種別。

㊀說は語を編みて、或る完き思想を言ひ表はすものなり。之れを記すには、漢字或は假名にて語を書き列ね、其の間に點を施す。

吾れ稚兒に近く寄りて、「吾兒は幾つ。」と問へば「六つなり。」と、云ふ。

㊁說を、其の體裁及び構造により、分類すべし。

第一、說の體裁。

㊀ 說の體裁によりて、之れを別ては、四種あり。說明體、疑問體、感動體、命令體、是れなり。

㊁ 說明體。事項を說明する說にして、斷止法の用言にて終るものなり。

得たるわざにて、思ひもかけぬ幸あるものなり。

彼れが今の心にて生ひ立ちたらむには、竹千代殿の爲には、雙なき忠臣にて候ふべし。

㊂ 疑問體。疑問する說にして、疑問の後置詞、或は疑稱の數詞、代名詞、副詞を具ふるものなり。

汝は何ぞて此處には來れるぞ。

詳かなる事は誰か知るべき。

㊃ 感動體。感歎の體裁ある說にして、感歎詞、或は希求の後置詞を具ふるものなり。

あはれ、いとめでたき御さまかな。

いでや、此の世に生れては願

はしかるべきことこそ多かるめれ。

老いず、死なずの藥もがな。

いで疾く行きて、見ばや。

㋕ 命令體。命令の體裁ある說にして、命令法の用言或は禁止の後置詞を具ふるものなり。

山風よ、吹きな散らしそ。

長四郎よ、取りて參らせよ。

疾く行け。

第二、說の構造。

㋺ 說を構成する語部を分ちて、五種

とす。主語、說語、客語、屬語、間投語、是れなり。

(ア) 主語。說の主體となる語にして、名詞・或は代名詞の用主格にあるものに限る。

(イ) 說語。說の說明となる語にして、動詞或は形容詞に限る。

(ウ) 客語。主語、說語、或は他の客語に副ひて、之れを定限する語にして、名詞、代名詞の物主格、副用格、受用格にあるもの、數詞、副詞に限る。

(エ) **屬語。** 主語、說語、客語、或は他の屬語に附きて、之れを助くる語にして、格詞、助動詞、後置詞に限る。

(オ) **間投語。** 語或は說の上、下に在りて、接續、感歎、呼掛等を爲す語にして、接續詞、感歎詞、獨立格の名詞、代名詞に限る。

春(客)の(屬)花(主)は(屬)秋(客)の(屬)紅葉(客)より(屬)優る(說)べし。

嗚呼(間)、正行(主)は(屬)四條畷(客)に(屬)奮戰(說)して(間)、

遂(客)に忠死(客)を(屬)遂げ(說)たり(屬)けり(屬)。

(二) 主語と說語とは說の要部にして、說は必ず之れを具へざるべからず、

花(主)咲(說)く

人(主)書(客)を(屬)讀(說)む。

但、命令體の說及び或る感動體の說には之れを欠く。

疾(客)く行(說)け。

あな(間)、面白。

(三) 說の構造によりて、之れを大別すれば、章、句の二種あり。

(ア) **章。** 事項を述べ斷りたる說なり。

(イ)　句。　事項を述べて章の一部を爲す説なり。

花(主)美しく(客)咲く(説)。　(一章)

雨(主)降り(説)、雷(主)鳴れど(間)、風(主)吹かず(説)。　(三句、一章)

春(主)は(風)、花(主)咲く(説)時(客)なり(説)。　(三句、一章)

四　章、句の構造によりて更に之れを別ては、章に五種、句に七種あり。

單章、連章、合章、複章、雜章、主語句、説語句、客語句、本句、對句、反句、副句、是れなり。

五　單章。　一事項を述べ、主語、説語、各一つある説なり。

花(主)咲く(説)。

春(客)の(風)花(主)美しく(客)咲け(説)り(風)。

六　合章。　單章の構造にして、主語或は説語が二つ以上合同しある説なり。

忠(主)と(間)孝(主)と(間)は(風)人倫(客)の(風)大道(客)なり(説)。

鳥(主)は(風)啼き(説)つゝ(間)、飛ぶ(説)。